高松市埋蔵文化財調査報告　第214集

奥の池堤防耐震補強工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

奥ノ池遺跡

2021年3月
高松市教育委員会
香川県広域水道企業団

例　　言

1　本書は奥の池堤防耐震補強工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書であり、奥ノ池遺跡を収録したものである。

2　発掘調査地及び調査期間、調査面積は以下のとおりである。
調査地：高松市西春日町　奥の池内
調査期間：令和元年 6 月 5 日～ 21 日
調査面積：112 ㎡

3　本案件は県企業体である香川県広域水道企業団の事業であるが、設立前の高松市上下水道局浄水課で発掘調査に関する協議を進めていた事業であるため、高松市教育委員会が調査を実施した。

4　本案件は事業者である香川県広域水道企業団高松ブロック及び高松市並びに高松市教育委員会の三者で協定を結び、現地調査及び整理作業は地方自治法第 180 条による補助執行により、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課が実施した。調査は同課文化財専門員　香川将慶、同課会計年度任用職員（令和元年度まで非常勤嘱託職員）　有岡京香が担当した。

5　発掘調査から報告書の編集まで高松市教育委員会が担当し、調査に係る経費は香川県広域水道企業団が全額負担した。

6　本書の執筆は第 2 章 1・2 節は有岡、それ以外は香川が担当し、編集は香川、有岡が行った。

7　本調査で得られた資料・成果物はすべて高松市教育委員会で保管している。

8　本調査に関連して、以下の分析・委託業務を発注した。
赤色顔料分析：徳島県立博物館（植地岳彦）
樹種同定：（株）吉田生物研究所
遺物写真撮影：西大寺フォト

9　標高は東京湾平均海面高度を基準とし、座標は世界測地系第Ⅳ系、方位は座標北を表す。

10　各実測図は、土器 1/4、石器 1/3・1/4、木器 1/4、玉製品 1/2 を基本とし、異なる場合はその旨を明示している。遺構の縮尺は各図面ごとに示している。

11　遺構の略記号は以下の通りである。
SR：流路跡　SD：溝　SK：土坑　SP：ピット

12　本調査を実施するにあたり下記の関係者の御協力・御教示を得た。記して感謝申しあげます。
香川県教育委員会、香川県広域水道企業団高松ブロック、香川県埋蔵文化財センター、
株式会社村上組、植地岳彦、岡本治代、草原孝典、松本和彦、渡邊誠

目　次

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯・経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　調査日誌抄・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第３節　奥の池の築造・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

第３章　検出した遺構・遺物

第１節　試掘・確認調査の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第２節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第３節　確認した遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第４節　寄贈資料と調査区周辺の遺跡分布について　・・・・・・・・・・・・・・・・27

第４章　自然科学分析

第１節　奥ノ池遺跡出土木製品等の樹種調査結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
第２節　奥ノ池遺跡出土品に付着する赤色顔料の分析報告・・・・・・・・・・・・・・32

第５章　まとめ

第１節　主な遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
第２節　弥生時代中期前葉～中期中葉の土器について・・・・・・・・・・・・・・・・36
第３節　流路跡の復元と周辺遺跡との関連・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡位置図（S=1/12,000）・・4
第２図　試掘トレンチ配置・発掘調査範囲図
　　(S=1/3,000)・・・・・・・・・・・7
第３図　調査区基本土層（S=1/80）・・ 9・10
第４図　調査区遺構配置図
　　(S=1/80)・・・・・・・・・・11・12
第５図　SR01 平・断面図（S=1/40）・・・13
第６図　SR01 第Ⅰ層・Ⅱ層①出土遺物・・15
第７図　SR01 第Ⅱ層②・Ⅲ層①出土遺物・17
第８図　SR01 第Ⅲ層②出土遺物・・・・・18
第９図　SR01 第Ⅲ層③出土遺物・・・・19
第 10 図 SR01 第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物①　・・・21
第 11 図 SR01 第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物②・・・23
第 12 図 SR01 出土木製品・・・・・・・・24
第 13 図 SD01・02 平・断面図　(S=1/40)・25
第 14 図 SK01・SP01・SX01 平・断面図
　　(S=1/40)・・・・・・・・・・・・26
第 15 図 SX01 出土遺物・・・・・・・・・・26
第 16 図 遺物包含層①・②出土遺物・・・ 27
第 17 図 その他の層位・表採遺物・・・・ 28
第 18 図 寄贈資料実測図・・・・・・・・ 28
第 19 図 流路跡復元図（S=1/2,000）・・・39

挿　表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表　・・・・・・・・・5
第２表　赤色顔料分析結果・・・・・・・・34
第３表　出土遺物一覧①・・・・・・・・・41
第４表　出土遺物一覧②・・・・・・・・・42
第５表　出土遺物一覧③・・・・・・・・・43
第６表　出土遺物一覧④・・・・・・・・・44
第７表　出土遺物一覧⑤・・・・・・・・・45
第８表　出土遺物一覧⑥・・・・・・・・・46

挿 図 写 真 目 次

写真１　奥ノ池遺跡内の石組確認状況・・28
写真２　樹種同定断面写真①・・・・・・30
写真３　樹種同定断面写真②・・・・・・31

写 真 図 版 目 次

１－１　SR01 検出状況（西から）
１－２　SR01 完掘状況（北から）
２－１　SR01 西側断面状況（北から）
２－２　SR01 中央付近断面状況（北から）
３－１　SR01 東側断面状況（北から）
３－２　SR01 自然木確認状況（西から）
３－３　SR01 杭確認状況（北から）
３－４　SR01 土器出土状況（北から）
４－１　SD01 完掘状況（北から）
４－２　SD02 完掘状況（北から）
４－３　SK01 完掘状況（南から）
５－１　SP01 断面状況（西から）
５－２　SP01 完掘状況（西から）
５－３　SX01 完掘状況（北から）
５－４　SX01 遺物出土状況（北から）
６－１　遺物包含層①上層完掘状況（西から）
６－２　遺物包含層①下層完掘状況（西から）
７－１　遺構完掘状況（西から）
７－２　調査区東側断面確認状況（北西から）
８－１　調査区西側断面確認状況（北から）
８－２　噴砂確認状況（北から）
９　出土遺物集合写真
10－１　凹線文・口縁が肥厚する土器の一群
10－２　出土甕類
11－１　櫛描直線文・波状文
11－２　口縁部施文文様
11－３　圧痕文突帯
12－１　弥生土器　壺①
12－２　弥生土器　壺①（他地域）
12－３　弥生土器　壺②（他地域）
12－４　遺物包含層②　弥生土器　甕
12－５　第 15 層　弥生土器　鉢
12－６　SX01　弥生土器　甕
12－７　弥生土器　壺
12－８　弥生土器　壺（他地域？）
13－１　弥生土器　高杯
13－２　弥生土器　内面付着物
13－３　弥生土器　コップ型土器把手
13－４　弥生土器　壺重弧文
13－５　石器　剥片
13－６　弥生土器　赤色顔料付着状況
13－７　管玉

第１章　調査の経緯と経過

第１節 調査の経緯・経過

本事業は香川県広域水道企業団高松事務所（現、香川県広域水道企業団高松ブロック・以下、企業団）により計画された奥の池の堤防劣化に伴う耐震補強工事である。事業地の一部が「奥ノ池遺跡」に含まれており、遺跡の遺存状況及び工事に伴い影響を受ける範囲を確認するため、事前に試掘調査が必要であることを企業団へ伝えた。その後、企業団から高松市教育委員会（以下、市教委）に試掘依頼があったため、令和元年５月 21、22 日に確認・試掘調査を実施した。その結果、事業地の一部の範囲で遺構・遺物を密に確認したことから、香川県教育委員会（以下、県教委）に報告し、周知の埋蔵文化財包蔵地「奥ノ池遺跡」の範囲変更を行うとともに、企業団に対して事業実施前に、周知の埋蔵文化財における保護措置が必要であることを伝えた。

その後、企業団から市教委に令和元年５月 24 日付けで文化財保護第 94 条に基づく発掘通知があり、文化財課は県教委に進達した。その後､県教委から５月 24 日付けで｢発掘調査｣の行政指導の通知があった。これを受け企業団と本市文化財課で協議を行い、文化財に影響を及ぼす範囲（今回の調査地）について発掘調査を行うことで双方合意した。これに際し、企業団が地方自治法に基づく企業団体であるため、企業団（発注者)、高松市（管理者)、市教委（監督者）の三者協定を結び、令和元年６月５日～ 21 日の期間に発掘調査を実施した。

第２節　調査日誌抄

令和元年６月５日　重機掘削開始。遺物包含層①掘削。

６月 10 日　遺物包含層①掘削完了。重機掘削。

６月 11 日　遺構検出。

６月 12 日　SD01・02、SR01 掘削開始。

６月 14 日　遺構平・断面図作成開始。

６月 19 日　遺構掘削完了。

６月 21 日　現地調査終了。

令和２年４月１日に令和元年度発掘調査事業に伴う整理作業の協定書を３者で締結し、遺物の洗浄や実測、写真撮影、図面整理、自然科学分析等を実施し、令和３年３月末にこれらの整理作業を終了し、発掘調査報告書を刊行した。

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松市は香川県の中央東寄りに位置する。南は讃岐山脈を隔てて徳島県と接し、北は瀬戸内海に面し、女木島、男木島、大島などの瀬戸内の島々も市域に含んで岡山県と対峙する。市域の中心に位置する高松平野は讃岐山脈からの河川の堆積作用によって形成された沖積平野である。東は屋島や立石山、西は五色台山塊や鷲ノ山が平野を囲うように分布し、中央には石清尾山、浄願寺山、室山、稲荷山からなる石清尾山塊が位置している。これらの山々は、浸食に弱い花崗岩の層に抵抗の強い安山岩や凝灰岩層が堆積することで形成されたメサ、ビュート型の様相を示している。平野を形作る河川として、東から新川、春日川、詰田川、御坊川、香東川、本津川が挙げられる。特に香東川は平野形成に最も大きな影響を及ぼし、現存の春日川以西はこの香東川によって形成された扇状地であると考えられている。現在の香東川は、寛永年間に高松藩奉行の西嶋八兵衛によって改修された流路であり、それまでは石清尾山塊南部から平野部中央を流れる流路が存在していた。御坊川や詰田川が現在でもその名残をとどめているほか、空中写真等や発掘調査により自然流路の痕跡が確認されている。

気候は温暖な瀬戸内式気候で、年間降水量が約 1,000 ｍｍと少ない地域である。古くから干ばつ、水不足に悩まされ、自然堤防を利用したため池や、旧河道を使った開析谷池が数多く築かれてきた。昭和 50 年には香川用水ができ、農業や工業用水として使われている。

奥ノ池遺跡は高松平野の中央部に位置し、南側以外の三方は石清尾山塊に囲まれている。それらの尾根を結んで貯水した奥の池内に奥ノ池遺跡が位置している。また南側は、香東川の名残である御坊川に面している。

第２節　歴史的環境

旧石器時代

高松平野と周辺丘陵部では雨山南遺跡、久米池南遺跡、またＡＴ火山灰上層でナイフ形石器が出土した中間西井坪遺跡が挙げられる。調査地周辺では石清尾山塊南西部に位置する中森遺跡において、石器ブロックが確認されたほか、片山池窯跡群でも瀬戸内技法を示す翼状剥片が出土している。

縄文時代

高松平野での縄文時代の遺跡数は、他の時代と比較して多くない。井手東Ⅰ遺跡では現地表下約 70cm でアカホヤ火山灰堆積層が確認され、中期における高松平野形成過程を垣間見ることができる。周辺では上天神遺跡において縄文晩期の旧河道の検出、遺物は浅鉢や打製石斧などが出土している。また、林・坊城遺跡、さこ・松ノ木遺跡 (1)、さこ・長池Ⅱ遺跡、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡、居石遺跡、東中筋遺跡からも縄文時代の遺物が出土している。

弥生時代

縄文時代と比べ、弥生時代の遺跡数は大幅に増加し、高松平野の各所で確認できる。奥ノ池遺跡周辺でも松並・中所遺跡、北山浦遺跡、西ハゼ土居遺跡等が確認できる。弥生前期にはさこ・長池遺跡、さこ・長池Ⅱ遺跡で小区画水田が検出され、早い段階から稲作文化が浸透していたことがうかがえる。また松並・中所遺跡では、環濠とみられる遺構が確認されている。

弥生中期の遺跡としては、西ハゼ土居遺跡で小区画水田21筆が検出されたほか、松並・中所遺跡では居住遺構が検出された。また北山浦遺跡では旧河道に挟まれた微高地上に集落が形成され、中期前葉～後葉にかけて続いていたと考えられている。この他にも石清尾山頂部から緩斜面にかけて中期後半の遺物が出土した摺鉢谷遺跡や、高地性集落が示唆される御殿貯水池南遺跡が知られている。

弥生後期の遺跡では上天神遺跡、天満・宮西遺跡、太田下・須川遺跡等で集落遺跡が確認され、平野部で集落の増加傾向がみられる。

古墳時代

古墳時代前期を象徴する遺跡として、石清尾山古墳群（国指定史跡）が挙げられる。鶴尾神社４号墳をはじめ、双方中円墳の猫塚古墳、刳抜式石棺が出土した石船塚古墳等、前期の積石塚古墳として著名である。中期古墳としては刳抜式石棺を有する三谷石舟古墳、組合式箱形土製棺で知られる今岡古墳があり、後期には相作牛塚古墳等の首長墳とみられる古墳が築造された。

集落遺跡については、古墳中期～後期の竪穴建物跡や掘立柱建物跡を検出した太田下・須川遺跡、萩前・一本木遺跡、韓式系土器が出土した六条下所遺跡などが挙げられる。

古代

高松平野では条里地割が広範囲に広がり、さこ・長池遺跡、さこ・松ノ木遺跡、井手東Ⅰ遺跡、蛙股遺跡、上天神遺跡、松縄下所遺跡などで条里境界線と思われる遺構が確認されている。現存史料で弘福寺領讃岐国山田郡田図が天平７（735）年の年紀を有し、高松市内で確認されている他所の条里関連の遺構と時期差がみられるものの、蛙股遺跡、松縄下所遺跡のように奈良時代の遺物が出土する遺跡もあり、条里地割の施行、存続期間を考えることができる。

奥ノ池遺跡周辺に位置する西ハゼ町、西春日町等を含む石清尾山南東麓一帯は、『和名抄』の香川郡坂田郷と比定され、浄願寺山東麓にある坂田廃寺では、調査により基壇跡や礎石、瓦のほかに水路改修工事の際に金銅誕生釈迦仏立像も出土している。また片山池窯跡群の調査では、１号窯跡で半地下式有牀式平窯が確認され、坂田廃寺出土瓦と同笵のものが確認されている。

中世

高松平野では、屋敷跡等を確認した空港跡地遺跡や、中世の港町の一部を確認した浜ノ町遺跡等が挙げられる。周辺では松並・中所遺跡において、12世紀末～13世紀中葉にかけて４時期にわたる遺構・遺物が確認され、居住地域として発展したことが窺える。また西ハゼ土居遺跡の調査でも、掘立柱建物跡などの同時期と推測される遺構が検出されている。

第１図　周辺遺跡位置図（S=1/12,000）

近世

旧市街地では高松城跡関連の発掘調査が広く行われ、絵図等の史料と比較しながら土地利用の変遷を辿っている。近年では高松城下や石垣等に関する調査が進み、高松城の構造等について明らかになりつつある。調査地周辺では、石清尾山塊東側に高松藩主の別荘として栗林荘が築かれた。また、西ハゼ土居遺跡では石組井戸や土坑のほか、16 ～ 17 世紀前半の溝で囲まれた屋敷地が 3 区画検出され、坂田城との関連性が示唆される。松並・中所遺跡では 18 世紀を中心とした土坑や、3 条の溝が検出され、炮烙や足釜、備前擂鉢などが出土している。そのほか、川南・東遺跡、川南・西遺跡、東山崎・水田遺跡等でこの時期の遺構が確認されている。

第 1 表　周辺遺跡一覧表

遺跡名	史跡・遺跡番号	種別
奥ノ池遺跡	1	集落
擂鉢谷遺跡	2	集落
石清尾山4号墳	3	古墳
石清尾山5号墳	4	古墳
擂鉢谷東斜面4号墳	5	古墳
擂鉢谷東斜面5号墳	6	古墳
擂鉢谷東斜面6号墳	7	古墳
擂鉢谷東斜面7号墳	8	古墳
擂鉢谷東斜面8号墳	9	古墳
擂鉢谷東斜面9号墳	10	古墳
擂鉢谷東斜面10号墳	11	古墳
擂鉢谷東斜面11号墳	12	古墳
擂鉢谷東斜面12号墳	13	古墳
擂鉢谷東斜面13号墳	14	古墳
擂鉢谷斜面14号墳	15	古墳
擂鉢谷東斜面15号墳	16	古墳
石瀬尾山1号墳	17	古墳
鏡塚古墳	18	古墳
石船塚古墳	19	古墳
小塚古墳	20	古墳
姫塚古墳	21	古墳
鶴尾神社1号墳	22	古墳
鶴尾神社2号墳	23	古墳
鶴尾神社3号墳	24	古墳
鶴尾神社4号墳	25	古墳
鶴尾神社5号墳	26	古墳
北山浦3号墳	27	古墳
北山浦1号墳	28	古墳
北山浦2号墳	29	古墳
北山浦遺跡	30	集落
（包含地）	31	散布地
奥ノ池4号墳	32	古墳
奥ノ池5号墳	33	古墳
奥ノ池6号墳	34	古墳
奥ノ池7号墳	35	古墳
奥ノ池8号墳	36	古墳
奥ノ池9号墳	37	古墳
奥ノ池10号墳	38	古墳
奥ノ池11号墳	39	古墳
奥ノ池1号墳	40	古墳
奥ノ池12号墳	41	古墳
奥ノ池13号墳	42	古墳
奥ノ池14号墳	43	古墳
奥ノ池15号墳	44	古墳
奥ノ池16号墳	45	古墳
奥ノ池17号墳	46	古墳
奥ノ池18号墳	47	古墳
奥ノ池19号墳	48	古墳
奥ノ池20号墳	49	古墳
奥ノ池21号墳	50	古墳
奥ノ池2号墳	51	古墳
奥ノ池22号墳	52	古墳
奥ノ池23号墳	53	古墳
奥ノ池3号墳	54	古墳
松並・中所遺跡	55	集落
西ハゼ土居遺跡	56	集落
坂田城跡（鶯田城跡）	57	城郭
石船塚東方古墳	58	古墳
稲荷山3号墳	59	古墳
稲荷山2号墳	60	古墳
稲荷山5号墳	61	古墳
室山城跡	62	城郭
稲荷山1号墳	63	古墳
稲荷山4号墳	64	古墳
稲荷山姫塚古墳	65	古墳
稲荷山北端4号墳	66	古墳
稲荷山3号墳	67	古墳
稲荷山2号墳	68	古墳
稲荷間北端1号墳	69	古墳
栗林公園	70	庭園
上天神遺跡	71	集落
太田下・須川遺跡	72	集落
史跡石清尾山古墳群	a	
特別名勝栗林公園	b	

第 3 節　奥の池の築造

奥の池に関する古文書はなく、詳細な築造年代は不明であるが、『讃岐のため池誌』（讃岐のため池編さん委員会 2000）では水利組合によって建立された石碑や鶴尾神社の石板をもとに、奥の池の伝承や築造年代をまとめている。石碑によると奥の池の築造は松平頼重によって寛文元年（1661）に築造と記されている。

しかし、文政元年（1818）10 月に讃岐国の池をまとめた『池泉合符録』によると、奥の池に関する記述が見当たらない（香川県 1987）。当時、奥の池が所在したと考えられる坂田村で池等の水利施設は「平尾上池、田中池、下新池、菰萱井、片山池、本井、丸渕、今井、山下出水、丸渕井坪、大渕井坪、高木井、東股、古川出水、清水出水、櫨ノ井、戸祭出水」が記載されている。奥の池の名称が江戸時代後期では上記のいずれかであった可能性もあるが、文政元年までは奥の池が築造されていなかった可能性がある。

『池泉合符録』以降、奥の池の存在が伺えるのは昭和 11 年（1936）になってからである（高松市水道局水道史編集室 1990）。この時に、水源確保に関する市議会議案で奥の池を活用すべきとの意見がでており、この頃には奥の池が存在したと考えられる。その後、昭和 19 年（1944）に水利関係者から高松市に奥の池を無償譲渡する協定書が交わされ、高松市が管理をすることになった。これを機に奥の池を上水道水源として活用され、高松市の水道事業に貢献するようになった。

〈註〉

(1) さこはこおりへん「氵」に谷である。

＜参考文献＞

大久保徹也編　1995『上天神遺跡』香川県教育委員会

大嶋和則　2005『西ハゼ土居遺跡』高松市教育委員会

小川賢・新井場萌　2015『御殿貯水池南遺跡』高松市教育委員会

香川県 1987「池泉合符録」『香川県史　第 10 巻資料編　近世資料Ⅱ』

金田章裕　1992「高松平野の条里と弘福寺領讃岐国山田郡田図」『讃岐国弘福寺の調査　弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』高松市教育委員会

讃岐のため池誌編さん委員会　2000「奥ノ池」『讃岐のため池誌』香川県農林水産部土地改良課

高松市水道局水道史編集室 1990「第 2 編第 2 章施設の拡張」『高松市水道史』高松市水道局

松本和彦　2000『松並・中所遺跡』香川県教育委員会

山下平重　1999『多肥松林遺跡』香川県教育委員会

山本英之・山元敏裕　1993『さこ・長池遺跡』高松市教育委員会

渡邊誠　2009『高松市指定史跡　片山池窯跡群　確認調査報告書』高松市教育委員会

渡邊誠ほか　2012『北山浦遺跡』高松市教育委員会

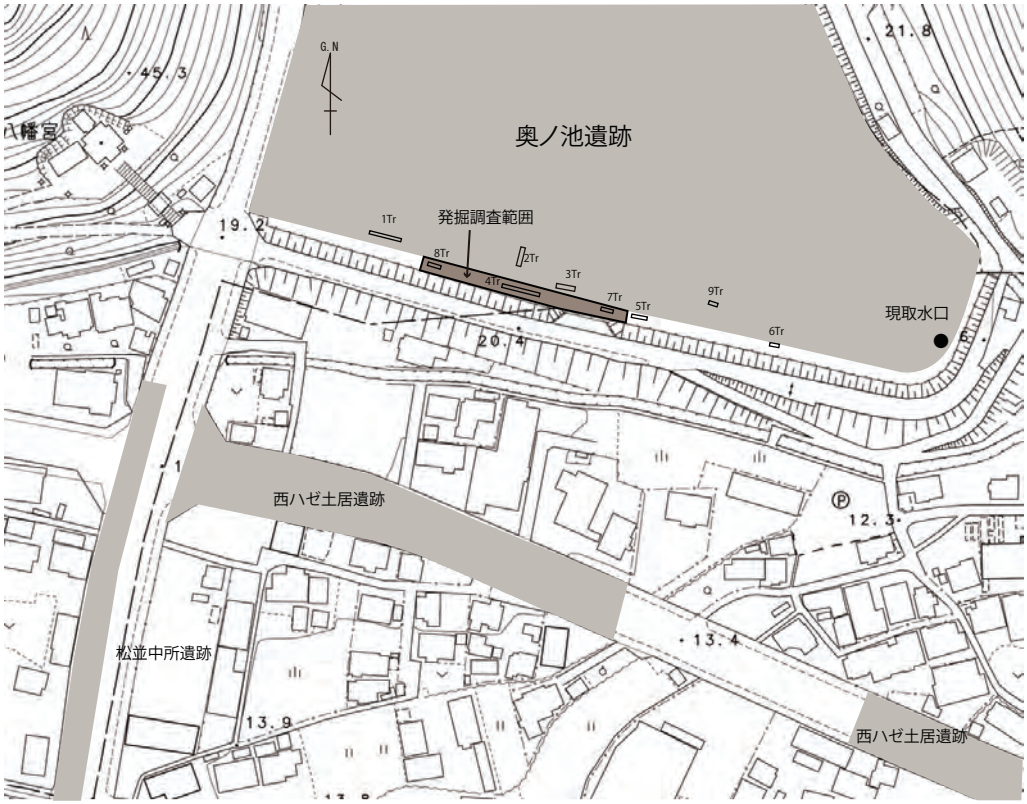
第３章　検出した遺構・遺物

第１節　試掘・確認調査の内容

奥の池耐震補強工事に伴い、当該地の埋蔵文化財の包蔵状況について把握する必要があることから、掘削が及ぶ範囲について試掘・確認調査を実施した。

調査はトレンチを計９本設定し、埋蔵文化財の包蔵状況を把握した（第２図）。そのうち、１～３・９トレンチは部分的に遺構面となり得る堆積層を確認したが、浚渠等によって遺構は削平されていた。一方、包蔵地に隣接している範囲に設定した４・７・８トレンチでは、弥生時代の土坑や遺物包含層を確認した。８トレンチで検出した土坑は本調査で確認したSX01の一部分であり、良好な弥生土器が出土した。５トレンチ以東は地形が西から東に向かって下がっており、遺構・遺物を確認できなかったことから埋蔵文化財の包蔵状況でないことが明らかになった。

調査結果を県教委に報告したところ、４・７・８トレンチの範囲を周知の埋蔵文化財包蔵地「奥ノ池遺跡」に追加登録され、今回の事業に伴い、発掘調査を実施することになった。また、試掘・確認調査で出土した土器類（SX01等）は本報告に掲載している。



第２図　試掘トレンチ配置・発掘調査範囲図（S=1/3,000）

第２節　基本層序（第３図）

基本土層は堤防側を図化した。上層は細分化していないが花崗土の造成土①・②がみられ、数回にわたり堤防の造成がなされている。花崗土はさらに上面まで造成されている。第１層は黄灰色の細粒砂層で、図化していないが近世以降の陶磁器が出土しており、横断面であるため様相は不明だが、江戸時代の耕作面等と推測できる。第３層のにぶい黄色細粒砂層の下面に後述する遺物包含層①が堆積している。遺構は遺物包含層①の下面から検出され、青線が遺構面になる。これも後述するが、調査区東側の遺構面以下に遺物包含層②が堆積している。

また、遺構確認面（青線）が調査区西側では標高約 12.0 ｍ地点で確認できるが、調査区東側では約 11.5 ｍで確認でき、地形が西から東に傾斜して下がっていることが分かる。また、現状地形でも東側に向かい堤内の水が集約されている。この地形傾斜は弥生時代前期頃の段階で既に生じており、現在までその名残を呈している。

また、第２層は噴砂と考えられ、遺物包含層①が弥生時代中期後葉以降に堆積したと考えられることから、この時期から江戸時代にかけて起こったものと推測できる。近隣の西ハゼ土居遺跡では時期が異なるが、弥生時代前期以前の噴砂を確認しており（大嶋 2005）、奥ノ池遺跡周辺は地震痕が生じやすい地域であると推測できる。

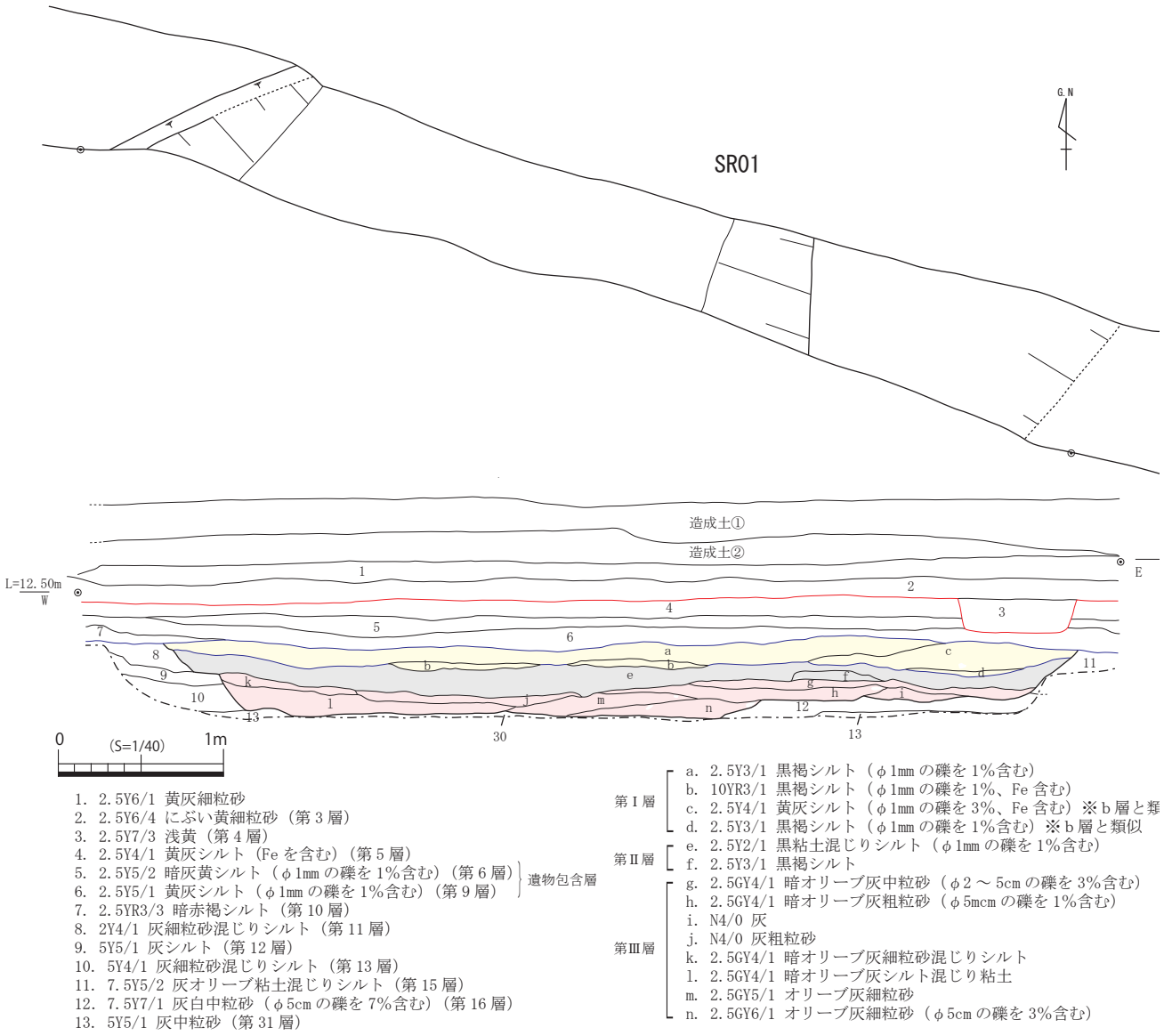
第３節　確認した遺構・遺物

今回の調査で流路跡１条、溝２条、土坑１基、ピット１基、性格不明遺構１基、遺物包含層２ヶ所を確認した（第４図）。各遺構の様相や出土遺物等は以下のとおりである。なお、年代に関する基準は信里編年（2002・2005）を参考にした。

SR01（第５～12 図）

調査区西側で検出した。検出した規模は南北長約 1.8 ｍ×東西幅約 11.1 ｍで深さ約 0.7 ～ 1.0 ｍである。検出状況はおおよその範囲で検出できたものの、明確な立ち上がりを検出することは困難であった。平面図では断面状況を考慮し、東側部分を復元した。流路跡は東側は２段落ちのような構造になっている。２段落ちの部分には板状木製品等や自然木を確認した。また杭も確認しており、152 は２段落ちあたりに突き刺さった状態で検出した。これにより、全容の把握まではできないものの、護岸施設等の可能性が推測できる。

堆積状況は色調や粒径から主に第Ⅰ～Ⅲ層に大別できると考えられる。第Ⅰ層は黒褐色シルトを基調とした堆積層ａ～ｄ層である。第Ⅱ層は黒色粘土混じりシルトを基調としたｅ層と黒色が強めの黒褐色シルトのｆ層からなる。第Ⅲ層はｇ～ｎ層で暗オリーブ灰色を基調とし、細砂～粗砂の粒径で、礫を含む層が多い。



第 5 図　SR01 平・断面図（S=1/40）

出土遺物は 1 ～ 155 である。層位毎にピックアップしており、1 ～ 4 までは第Ⅰ層、5 ～ 24 までは第Ⅱ層、25 ～ 91・152・153・155 が第Ⅲ層、92 ～ 151・154 は SR01 の第Ⅰ～Ⅲ層中から層位の特定不明で出土した遺物である。

（第Ⅰ層）

1 は壺の口縁～頸部である。外面は口縁部から頸部上部にかけてハケ調整、頸部に圧痕文突帯を施す。2 は壺の体部で外面にミガキ調整後、2 条の列点文を施文し、内面に粗いハケ調整をする。3 は壺の体部で 2 条の沈線とその上部に斜線文が見られる。ベンガラによる赤色顔料が塗布されている。弥生時代前期と考えられる。

4 は甕の口縁部である。口縁部を丸く摘みあげ、凹線文 3 条を施す。内面はヨコナデとケズリ調整とみられる痕跡がある。

（第Ⅱ層）

5 ～ 8 は壺の口縁部から頸部である。5 は口縁端部を垂下、端面に 4 条の凹線文を施文し、内面に斜格子文と現存 9 個の穿孔、4 条の簾状文を施す。6 は外面に縦ハケ、ナデ調整を行い頸部に貼付突帯 7 条を貼り付け、一番下部の突帯に刻目文を施す。また、爪先状圧痕が見られる。口縁は上下に緩やかに摘み出している。さらに口縁に化粧土を薄く貼り合わせ櫛描沈線を施す。また、円形浮文を 2 列配置し、浮文の中央に竹管文を施す。内面はナデ整形し、上面に貼付突帯 1 条、口縁と貼付突帯の間に波状文が見られる。7 は口縁部を下方に丸く摘み出している。口縁に斜格子文を施文し、左から右方向に線刻している。外面はハケ調整、内面は摩滅しているが、一部ミガキ調整する。8 は肥厚した口縁とその端面に列点文がみられる。部分的に内外面にベンガラによる赤色顔料が見られる。

9 は壺の底部である。外面は板ナデ後ナデ調整、内面はミガキ後ナデ調整する。底部は板ナデ調整する。

10・11 は壺の体部である。10 は外面に重弧文を施文する。弥生時代前期と考えられる。11 は体部の中央で鋭く「く」の字状に屈曲する。外面は体部の屈曲点前後を横方向のミガキ、上半はハケ調整、下半はミガキ調整する。内面は強い板ナデと絞り目が見られる。

12 ～ 16 は甕の口縁部～体部である。13 の口縁部には摩滅しているが凹線文が 2 条見られる。外面にハケ調整、内面は頸部の屈曲点に沿って横方向のハケ調整する。14 は外面にハケ調整する。15 は外面にハケ調整、内面をミガキ調整をする。16 は口縁に刻目文が見られる。

17・18 は甕の体部である。17 は内外面にミガキ調整し、内面にコゲが見られる。

19 ～ 21 は甕の底部である。19 は外面をミガキ調整、内面をナデ調整する。20 は外面をミガキ調整する。内面にコゲが付着している。21 は外面をミガキ調整する。

22 は鉢の底部～体部である。底部は外側に摘み出している。側面から底面に向かって 2 個一対の穿孔が見られる。内面はハケが見られ、底部から体部にかけて粘土を詰め、形を成形した痕跡が見られる。

23 は高杯の脚部～杯部である。脚部の脚裾から杯部にかけてナデやミガキ調整が見られる。脚部と杯部に粘土の貼り付けが見られ、脚部と杯部を別々に作り貼り合わせた可能性がある。

24 は砂岩のたたき石である。

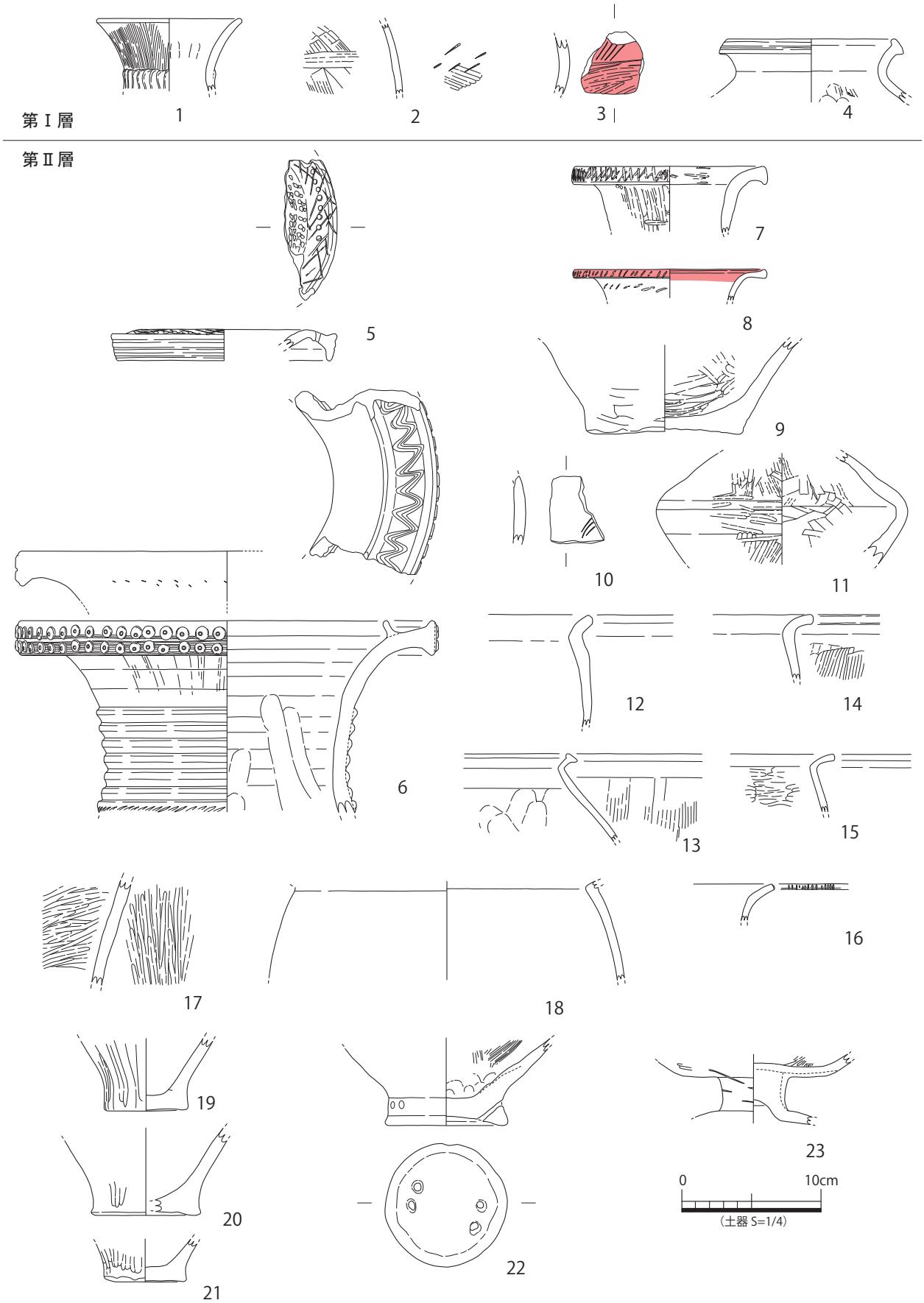
（第Ⅲ層）

25・26 は短頸広口壺の口縁部から体部である。25 は体部上半外面にミガキ調整後、櫛描波状文と櫛描直線文を交互に施文する。頸部に 6 条の刻目突帯文が巡る。また、縦方向に 2 条 1 組の棒状浮文を施す。直立する口縁端部上面に針状の工具で斜格子文を施す。破損面等に粘土紐の単位が見られる。26 は直立する口縁を持つが、無文で外面にハケ調整後、口縁部側をナデ調整する。

27 は短頸壺の口縁部で、外面に櫛描直線文を施文し、内面をミガキ調整する。

28 は広口壺の口縁部である。口縁の形状は内向し、口縁端部を若干外側に拡張させる。外面は櫛描格子文がみられ、小片であるため配置間隔等不明だが、穿孔が 2 か所確認できる。

29 ～ 40 は壺の口縁部から頸部である。29 は弥生時代前期末頃と考えられる。30 は外面に圧痕文突帯



第 6 図　SR01 第Ⅰ層・Ⅱ層①出土遺物

を施す。31 は口縁部に刻目文、外面頸部に圧痕文突帯を施す。圧痕文突帯以下をハケ調整する。32 は外面に突帯を施し、縦方向のミガキ調整をする。内面は横方向のミガキ調整をする。33 は口縁部に刻目文を施文し、頸部に内面からの穿孔 2 か所が確認できる。内外面をハケ調整する。34 は外面をヨコナデ調整、内面は指ナデ調整し、外面にヘラ状圧痕が確認できる。35 は口縁部に刻目文を入れ、タテハケ調整後、口縁下部に櫛描直線文を施す。36 は口縁下部を外側に摘み出し、口縁端部に針状のもので斜格子文を施す。37 は頸部に 2 条の圧痕文突帯を、口縁部に刻目文を施す。38 は頸部に 2 条の圧痕文突帯を施し、口縁部に刻目文がみられる。外面をハケ調整する。39 は口縁と内面上部に円形浮文が見られる。40 は壺と考えられるもので、外面に貼付突帯を有するが他の貼付突帯の状態と比べ幅が細く、端部が鋭い形状である。

41 は壺の頸部である。外面に 2 条の貼付突帯と内面から外面にかけて穿孔が 2 か所がみられる。内面はナデ調整する。内面上部に重弧文が見られる。

42 ～ 56 は壺の体部である。42・44 は外面にハケ調整後、櫛描波状文と櫛描直線文を施文している。43 は外面をハケ調整後、櫛描波状文と櫛描直線文を交互に施す。内面はハケ、板ナデ調整がみられる。45 は外面はミガキ調整後、櫛描直線文 2 条、櫛描波状文 1 条確認している。46 は外面にタテハケ調整後、櫛描波状文が見られ、単位は不明だが数条にわたり施文したと考えられる。内面に指オサエと板ナデ調整する。47・48 は外面にハケ調整後、櫛描波状文と櫛描直線文を施す。内面はハケ調整後、指オサエが見られる。48 の内面はヘラケズリ後ナデ調整する。49 は外面に櫛描波状文、櫛描直線文、刺突文を施す。50 は外面にハケ調整を行った後、圧痕文突帯を施す。内面はハケ調整する。51 は外面に粗い櫛描沈線 11 条が残存している。内面はミガキ調整する。52 は外面をミガキ調整後、列点文を 2 条施す。53 は外面に櫛描直線文を数回に分けて引き、24 条残存している。櫛描直線文の下に列点文 2 条残存している。内面は板ナデとミガキ調整し、指オサエ、絞り目が見られる。54 は外面に刻目文を有する貼付突帯を施し、内外面をミガキ調整する。55 は外面にハケとミガキ調整後、5 条の櫛描直線文を施文している。内面は指オサエ後ハケ調整する。56 は外面にヘラ描直線文 2 条、内面にミガキ調整する。

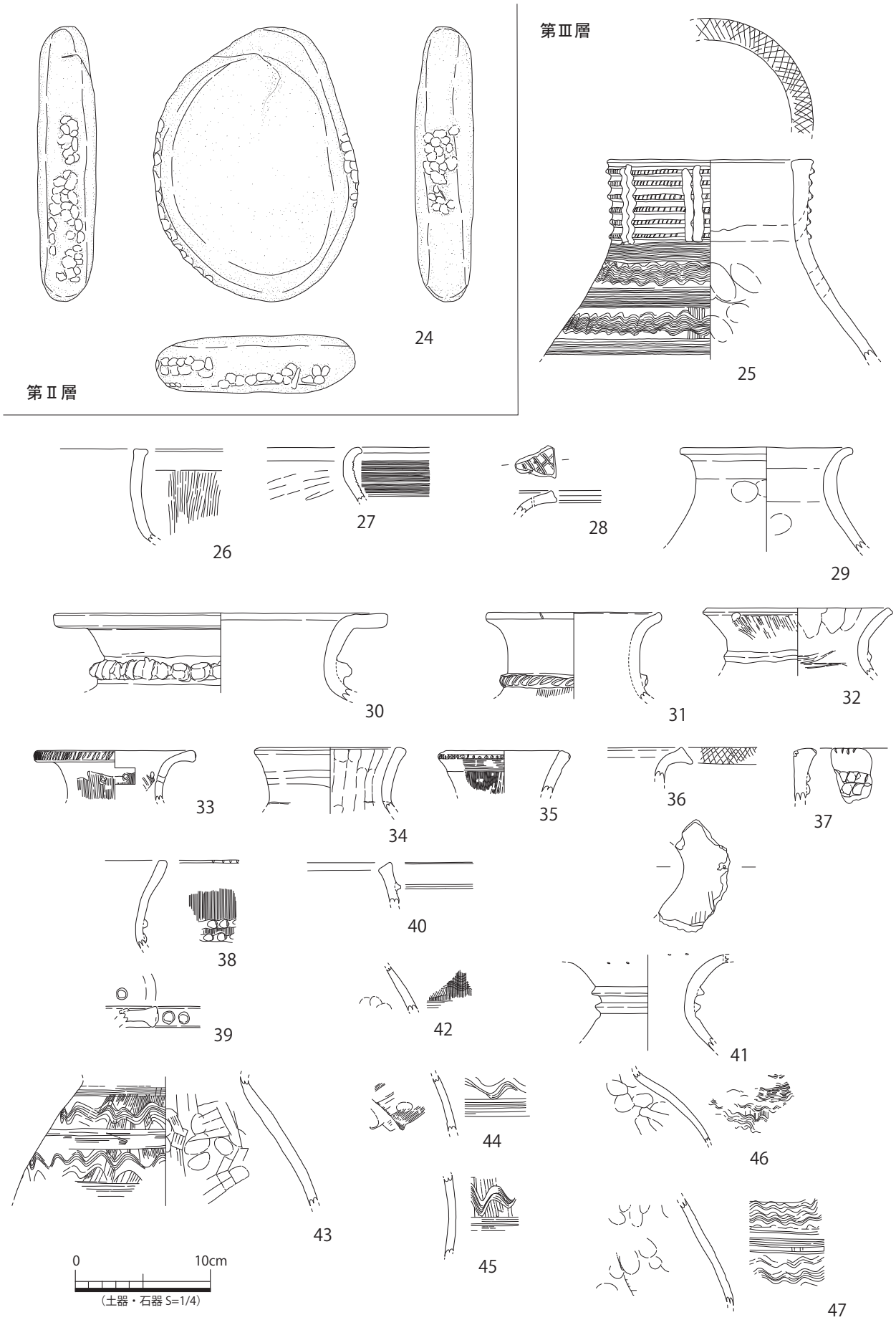
57 は二重口縁壺の口縁部である。直立する口縁部を持ち外面に凹線文 5 条を施す。

58 ～ 60 は壺の底部である。58 は外面をミガキ調整する。59 は外面をミガキ調整する。60 は外面にミガキ調整、内面にハケ調整がみられる。

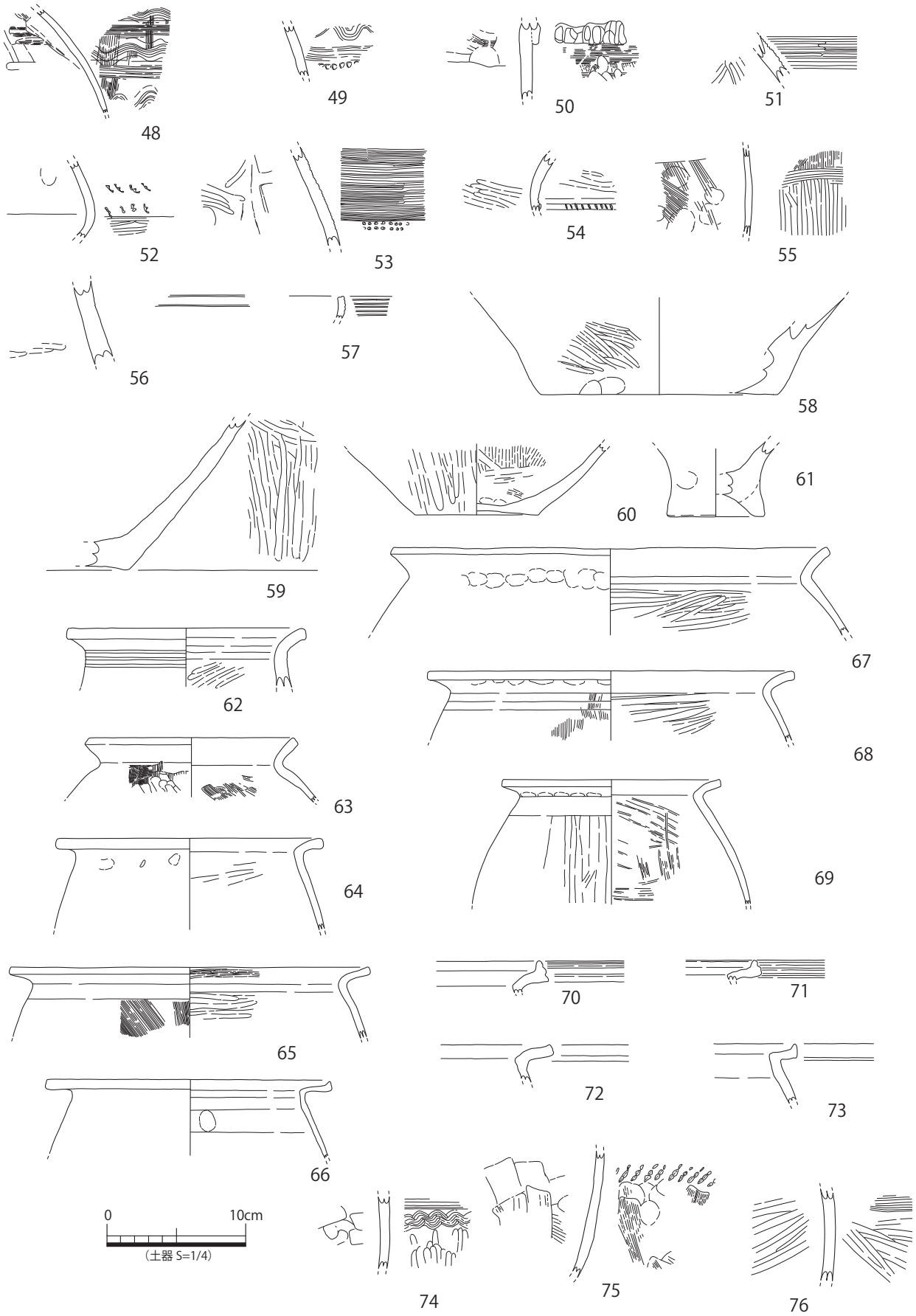
61 は脚付壺と考えられる脚部である。

62 ～ 73 は甕の口縁部～体部である。62 は小型の甕で、外面にヘラ描直線文 3 条を施文し、内面をミガキ調整する。63 は外面をハケ調整後ミガキ調整、内面をハケ調整する。65 は外面をハケ調整、内面をミガキ調整する。66 は口縁の屈曲部分は強い指ナデをしており、口縁は上面に向かい摘み出している。内外面に煤が付着している。67・68 の外面は口縁の屈曲に沿って指オサエが見られる。内面にミガキ調整する。68 は内外面に煤が付着している。69 は外面のミガキ調整後、口縁部を横ナデ調整し、内面はハケ調整する。70、71 は口縁部に凹線文を施す。72 は内面の口縁部の屈曲部を強い横ナデで調整する。73 は口縁端部を上方に拡張し、内面の屈折部は強い横ナデ調整する。内面はナデ調整する。

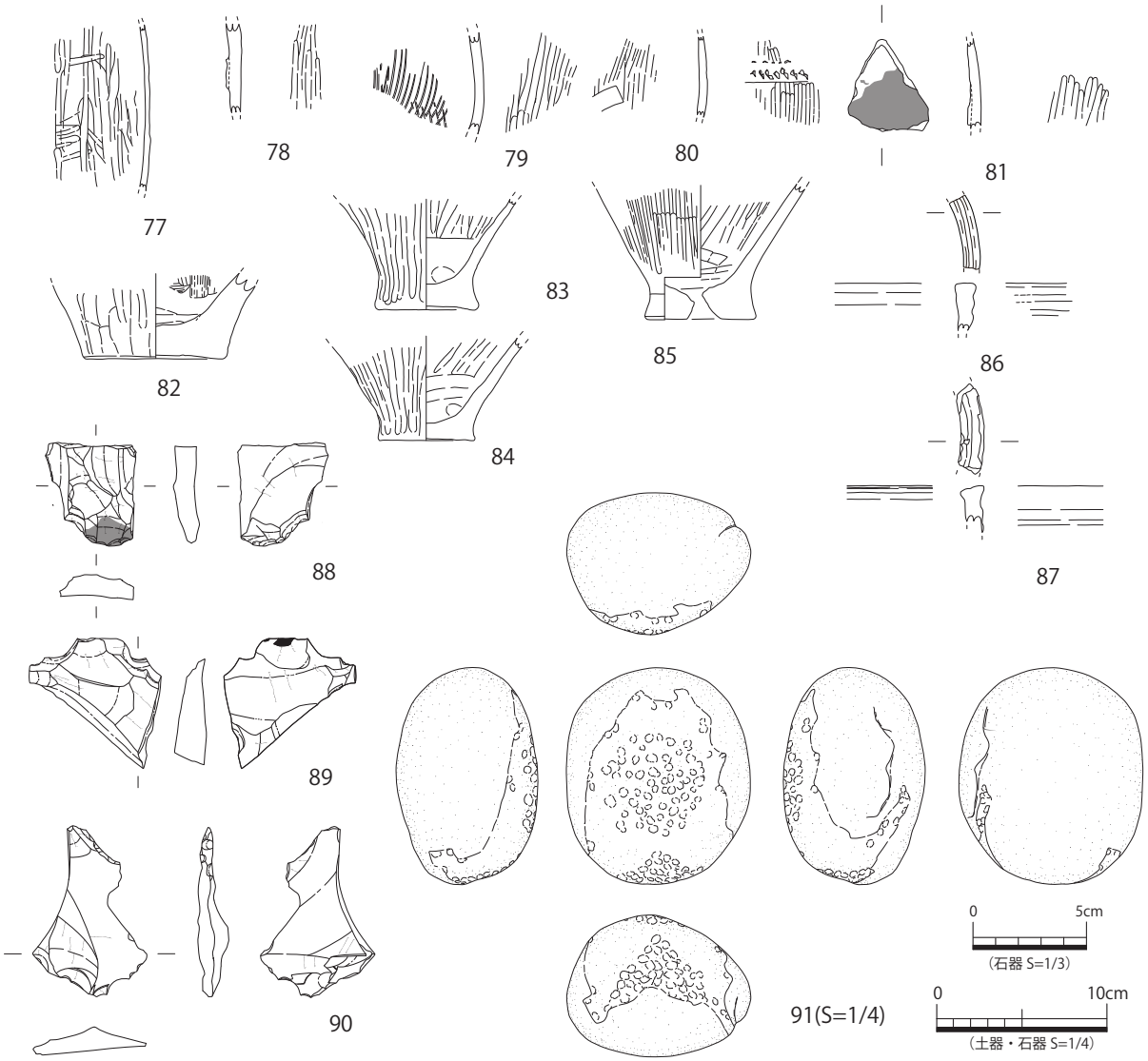
74 ～ 81 は甕の体部である。74 は外面にミガキ調整後、櫛描直線文、櫛描波状文を施す。施文単位は他



第 7 図　SR01 第Ⅱ層②・Ⅲ層①出土遺物



第 8 図　SR01 第Ⅲ層②出土遺物



第 9 図　SR01 第Ⅲ層③出土遺物

の波状文と異なり、単位が短く細かく、一つの波状文を一単位として施文している。内面は指ナデ調整する。内外面に煤が付着している。75 は外面にハケ調整後、刺突文を施す。76 は外面に櫛描直線文 7 条が残存している。内外面をミガキ調整する。77 は器壁が薄く、外面に煤が厚く付着しており、被熱を受け脆い。内面は板ナデ後、ミガキ調整する。78 は外面にミガキ調整し、内面に付着物があるが、物質は不明である。79 は外面はミガキ調整、内面に粗いハケ調整する。81 は外面はミガキ調整し、コゲが付着している。内面には 78 と同様とものと考えられる付着物がある。

82 ～ 84 は甕の底部である。82 は外面に板ナデ後、ミガキ調整、内面底部に追加で粘土を貼り付け整形した後、粗いハケで整形する。83、84 は外面にミガキ、内面は底部に近い方を横方向、体部側を縦方向のヘラナデ調整する。

85 は甕転用の甑の底部～体部である。外面をミガキ調整、内面をミガキ、板ナデ調整する。コゲが付着していることから、甕として使用後に転用されたことがわかる。

86 は高杯又は鉢の口縁部である。口縁垂直に立ち上がるタイプである。外面に凹線文 2 条がみられる。

87 は鉢の口縁部で、口縁端部と外面に緩く施文した凹線文がみられる。

88 は打製石斧、89・90 は剥片でいずれの材質もサヌカイトである。91 はたたき石で材質は砂岩である。

（第Ⅰ～Ⅲ層出土）

92 ～ 94 は無頸壺である。92 は口縁部で口縁を平坦に整形し、両端を、特に外側を摘み出す。突帯を 1 条廻らせ、口縁と突帯の間と突帯以下に凹線文を施す。突帯の下部に 2 孔一対の穿孔を入れる。93 は外面に口縁部以下に櫛描直線文と列点文 2 段を施す。内面は成形時の絞り目が見られる。94 は外面にハケ調整後、上部から 2 条の刺突文、櫛描直線文、櫛描斜格子文、櫛描直線文、流水文、2 条の刺突文を施す。内面は指オサエやヘラミガキ調整する。形状は卵型を呈する。

95 ～ 104 は壺の口縁部である。95 は口縁端部を下方に摘み出し、斜格子文を施す。外面に指頭圧貼付突帯を貼り付け、ハケ調整する。96 は口縁端部に刻目文を施す。97 は口縁部に鈍い凹線文を施す。98 は内外面にミガキ調整する。99 は口縁部の上面を平坦に整形する。3 条の貼付突帯、口縁部と突帯に刻目文を施す。100 は逆「ハ」の字状の短い口縁を持つ。101 は口縁を平坦に整形し、内側に摘み出す。口縁に刺突文とミガキ調整、内面にハケ調整する。102 は外面に貼付突帯、口縁部と突帯に刻目文を施す。103 は口縁端部と内面上部に櫛描波状文が施文される。104 は口縁端部に強いナデがみられ、刻目文が施文される。外面にハケ調整、内面上面に圧痕文突帯を貼り付ける。穿孔が確認できる。

105 ～ 108 は壺の頸部～体部である。105 は外面をハケ調整後、2 条の突帯を貼り付ける。106 ～ 108 は外面に圧痕文突帯を施す。107 は圧痕文突帯を 2 条巡らす。

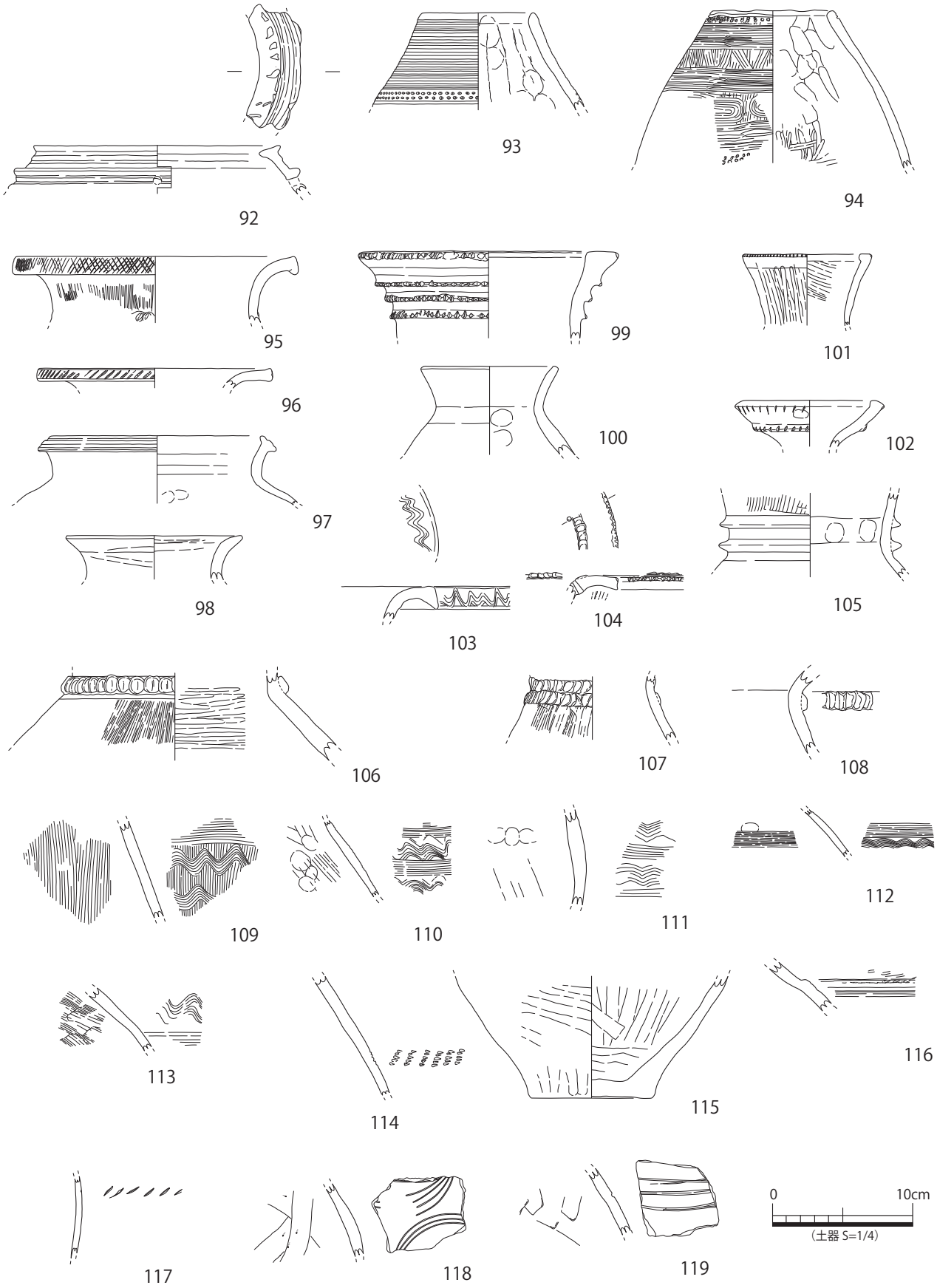
109 ～ 114 は壺の体部である。109 ～ 113 は櫛描直線文と櫛描波状文が施文される。外面は施文前にハケ調整するものがあり、内面もハケ調整するものが多い。111 は他の個体と施文方法が異なり、波状文は連続施文ではなく弧状の部分を 1 単位として施文している。114 は外面に 5 条分の櫛描列点文を施す。

115 は壺の底部で外面ミガキ、内面板ナデ調整をする。

116 ～ 119 は壺と考えられる器種でいずれも体部である。116 は外面に段を削り出し、沈線 2 条を入れ、ミガキ調整する。内面はヘラケズリ調整する。117 は外面に刻目文がみられる。118 は体部上半部である。外面に連弧文状の文様が施文される。119 は外面に沈線 3 条を施す。

120 ～ 132 は甕の口縁部～体部である。調整の多くは内外面ともにハケ又はミガキ調整するものが多い。120 は口縁部端を上方に内反するような形状で摘み出している。口縁部外面に凹線文を施す。121 は口縁の形状を「く」の字状にする。外面側の屈折部に沈線を施す。123 ～ 125 の口縁の形状は外反している。127 は口縁部を下方にわずかに摘み出し、口縁端部を強いナデ整形する。128 は口縁に凹線文 3 条を施す。弥生時代中期中葉から後葉頃の遺物と推測される。129 は口縁部を折り曲げ成形する。130 は口縁上面に粘土を貼り付け外反する。131 は内面に接合痕が残る。132 は逆「L」字状の口縁を持つ甕である。外面に直線文を施す。

133 ～ 136 は甕の体部である。133 は外面に櫛描直線文を施す。134 は外面に刺突文を施す。135 は外面にハケ調整後、刻目文を施す。内面は指オサエ調整する。136 は外面にハケ調整した後、簾状文を施文し



第 10 図　SR01 第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物①

ている。内面にミガキ調整する。

137 は甕の底部である。

138・139 はコップ型土器である。138 は体部から脚部で把手の付け根がみられる。脚部外面には現存 3 状の櫛描直線文が、内面にコップの底面が剥離した痕跡がみられる。139 は把手である。138 と胎土が類似することから同一個体である可能性がある。

140 ～ 143 は高杯である。140 は脚部で円形の透かしが見られる。141 ～ 143 は脚部である。141 は脚部と杯部の境に櫛描沈線文 3 条を施す。内部は杯部の粘土板が剥離している。144 は高杯の口縁部と考えられる。口縁部を平坦にし、内面側に摘み出す。外面は凹線文を施す。

145、146 は鉢の口縁部～底部である。145 は口縁部～体部である。口縁部を平坦に整形し、内傾させる。外面は凹線文を施す。146 は鉢の口縁部～底部である。内面にケズリと板ナデ調整する。

147 は甑の底部である。底部に焼成後に穿孔を 1 ヶ所穿つ。外面にミガキ、内面に板ナデ調整する。

148 ～ 151 は石製品である。148・150 は楔形石器で、材質はサヌカイトである。148 は両極技法を用いている。149 はサヌカイトの石鏃である。151 は碧玉製の管玉である。中央部分に穿孔の結節点があり、両側から穿孔したと考えられる。

152 ～ 155 は木製品である。152 は杭である。写真図版 3-3 のように流路底に突き刺さった状態で検出したものである。先端は破損しているが、わずかに加工痕のような痕跡が見られる。153 ～ 155 は板材である。明瞭な加工痕はほとんど見られないが、板状に整形した割材と推定される。

出土遺物に信里編年前期Ⅱｂ～Ⅱｃに位置づけれる弥生時代前期後半頃の遺物（132 等）も含まれるが、出土遺物の多くが信里編年中期Ⅱ -1 ～Ⅱ -2 に位置づけられる弥生時代中期前葉～中期中葉頃の遺物の割合が高く、この頃に埋没が進行したと考えられる。わずかに信里編年Ⅲ -1 ～Ⅲ -2 に位置づけられる弥生時代中期後葉と考えられる土器（128 等）も出土しているため、最終埋没はこの時期と考えられる（信里 2002、2004）。

SD01（第 13 図）

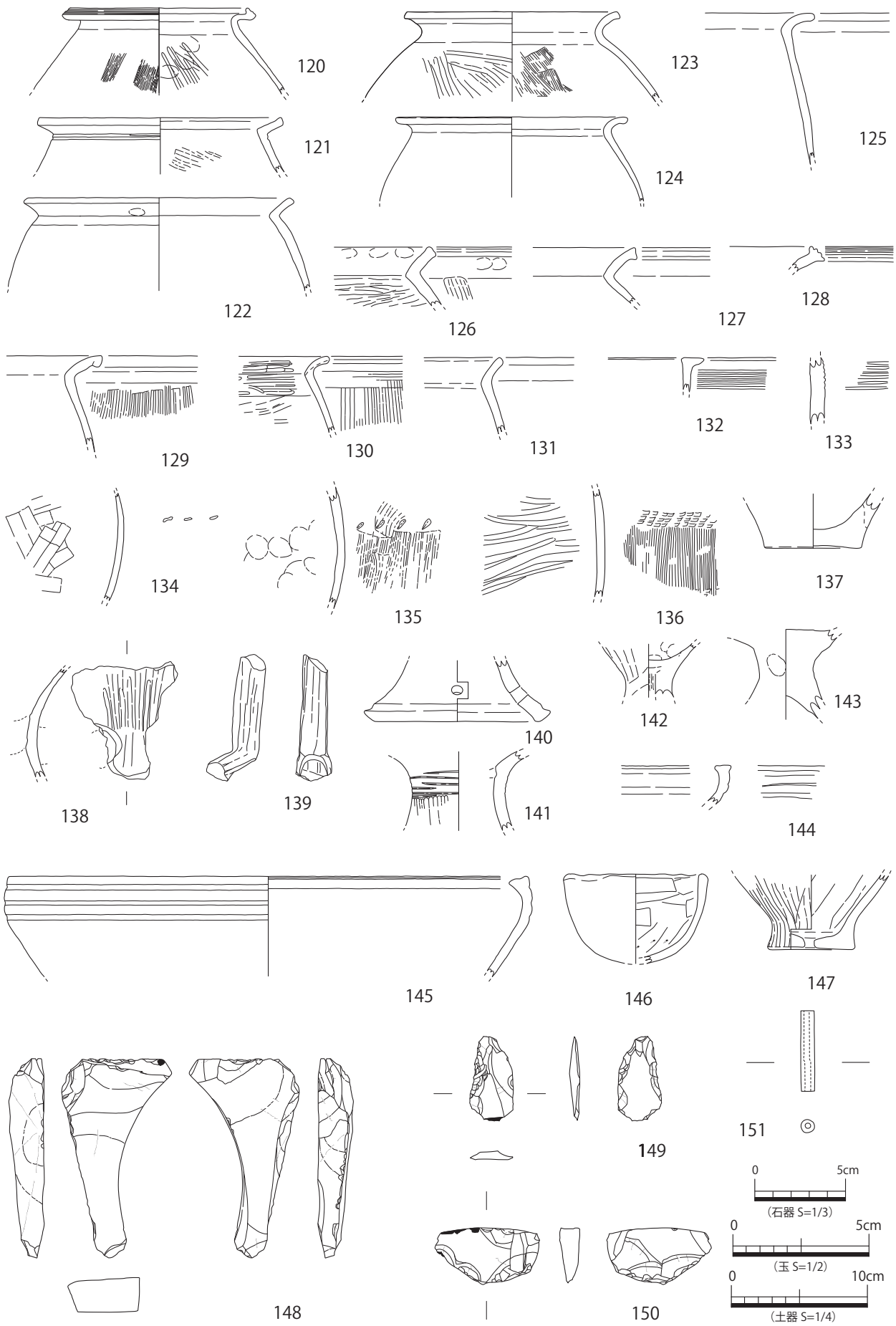
調査区東側で検出した。軸方向は南北である。検出した規模は南北約 1.8 m×東西約 0.2 mで深さ約 0.2 mである。

遺物が出土していないため詳細な年代は不明だが、堆積順序から弥生時代中期前葉～中期後葉頃と考えられる。

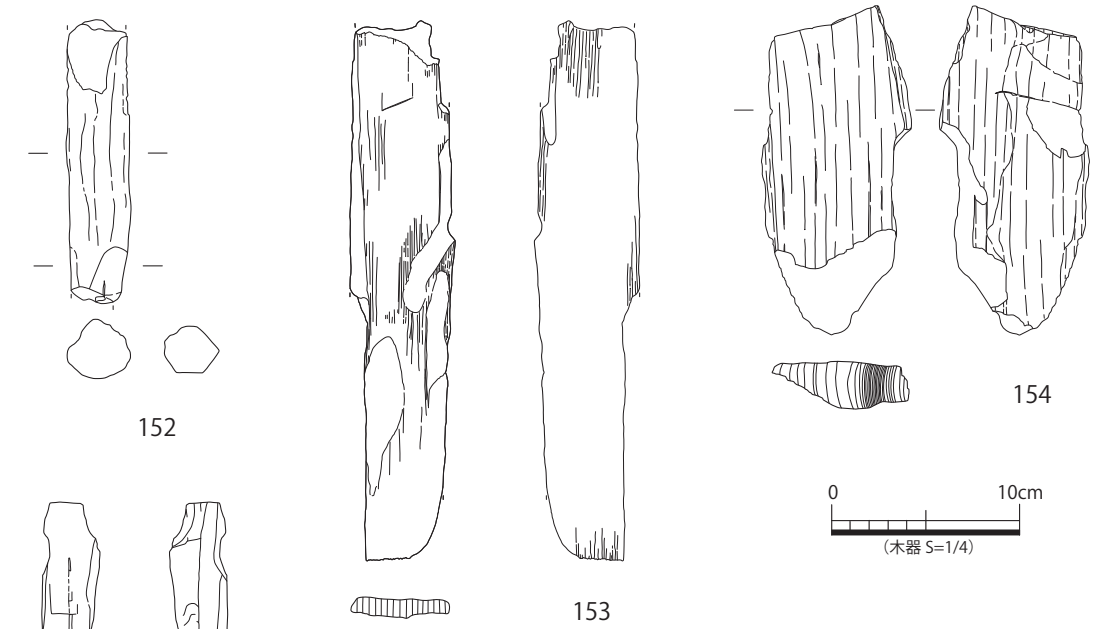
SD02（第 13 図）

調査区東側で検出した。軸方向は南北である。検出した規模は南北約 1.8 m×東西約 0.2 mで深さ約 0.3 mである。

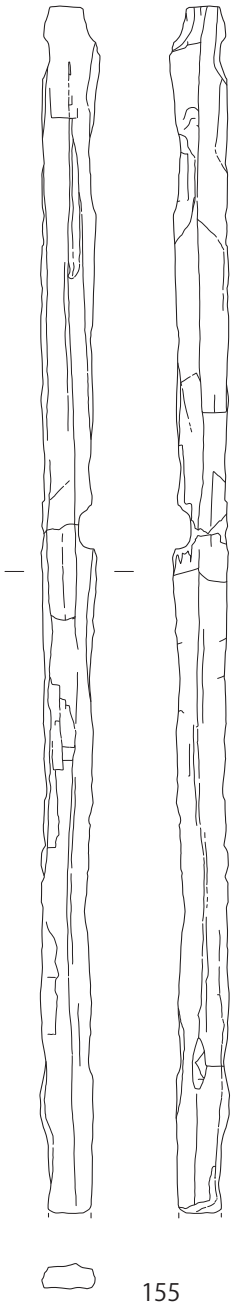
遺物が出土していないため詳細な年代は不明だが、堆積順序から弥生時代中期前葉～中期後葉頃と考えられる。



第 11 図　SR01 第Ⅰ～Ⅲ層出土遺物②



第 12 図　SR01 出土木製品



SK01（第 14 図）

調査区西側で検出した。検出した規模は南北約 0.2 m×東西約 0.4 m で深さ約 0.15 m である。平面形状は方形と推測できる。南側は試掘トレンチによって一部削平されており、近接する SX01 を切っている。

SP01（第 14 図）

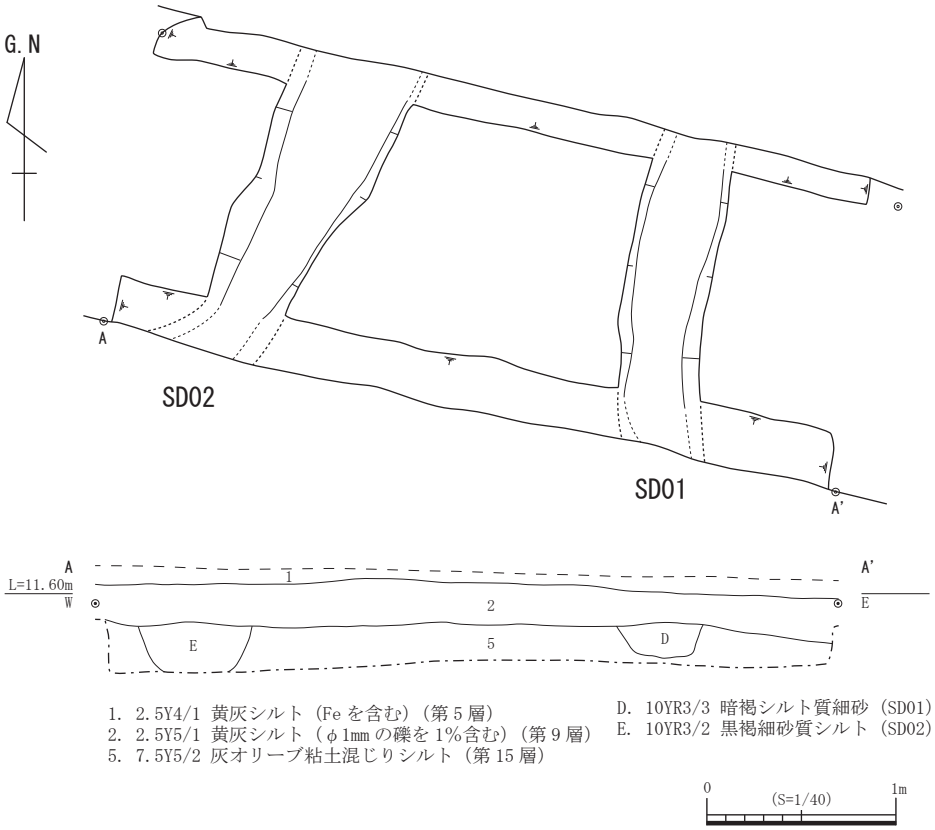
調査区西側で検出した。検出した規模は直径約 0.2 m で、深さ約 0.1 m である。試掘トレンチによって西側は削平されている。

SX01（第 14・15 図）

調査区西側で検出した。平面形状は円形になると推測でき、直径約 2.1 m で深さ約 0.2 m である。試掘トレンチによって東側部分や床の一部分が削平されている。土層は 3 層に分けられる。埋土はいずれも緑灰色シルト～細砂層である。A 層はわずかに炭化物が確認できる。いくつもの掘り込みが見られるが、掘削中に明確な切り合い関係は見られなかったため、同一遺構と認識して掘削した。遺構の性格は形状が整った円形であったことから建物跡の可能性を考えたが、規模が推定約 6.5 ㎡と小型であることや柱穴を確認していないことから、遺構の性格を特定できなかった。

出土遺物は 156 ～ 158 である。156 は壺の頸部である。外面に圧痕文突帯を 2 条、内面にハケ調整が見られる。157 は壺の底部から体部である。外面をミガキ調整、内面をヘラケズリ調整する。

158 は甕の口縁部～体部である。外面にハケ調整後、ミガキ調整する。



第13図　SD01・02平・断面図（S=1/40）

時期は弥生時代中期前葉頃と考えられる。

出土遺物が信里編年中期Ⅱ-2に位置づけられることから、弥生時代中期中葉頃に埋没したと考えられる（信里2005）。

遺物包含層①（第3・16図）

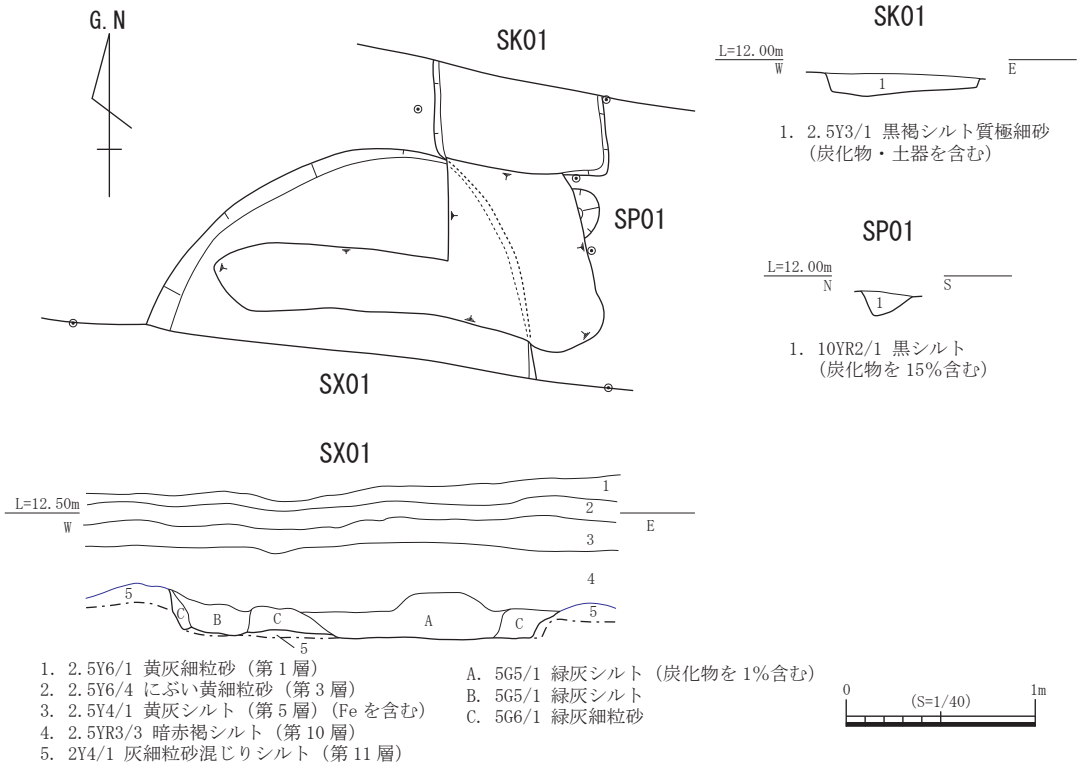
調査区全面に被覆する遺物包含層で赤線以下、青線以上の堆積層である。遺物は満遍なく出土するが摩滅しているものが多く、出土量は遺物包含層②に比べ少量である。試掘調査時に2層分確認していたことから上層と下層に分けて掘削した。上層は5層、下層は第7～10層である。土質は上面のベースとなる第5層、下面の主体的な堆積層である第9層とも黄灰色シルト層で、第9層は小礫を若干含む。

出土遺物は159・160である。159は弥生土器の壺の口縁部である。口縁端部を下方に摘みだし、斜格子文を施す。160は試掘調査時に第10層から出土した甕の底部である。全体的に摩滅しているが、外面はミガキ調整する。

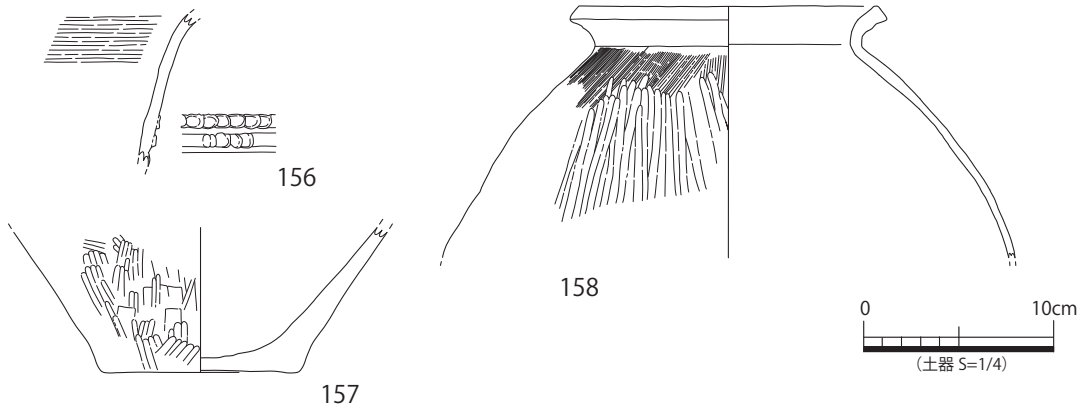
遺物包含層①の埋没開始時期は、SR01の埋没が遅くとも弥生時代中期後葉までに埋没したと考えられることから、弥生時代中期後葉以降に堆積したと考えられる。

遺物包含層②（第3・16図）

遺物包含層②は調査区東側の遺構面（青線）以下で検出した第19～23層、第27～30層の範囲である。色調は灰オリーブ又は灰白色を中心とし、中粒砂以上の粒径で礫を含む層が多い。基本土層でも前述した



第14図　SK01・SP01・SX01 平・断面図（S=1/40）



第15図　SX01 出土遺物

が、遺構面が調査区の西から東に向け傾斜をしており、調査区西側に比べ遺物包含層②の遺構面は1m近く下がっている。また、遺物の取り上げ地点の記録まで至っていないが、各層から出土し、特に第27～29層を中心とした範囲で多く出土した。一方、遺物包含層の両端にいくにつれ出土量は減少する傾向にある。

出土遺物は161～166である。161～163は甕の口縁部から体部である。161は内外面にミガキ調整し、外面に焼成時の破裂痕が見られる。弥生時代中期前葉頃と考えられる。162は逆「L」字状口縁部を持ち、外面に櫛描直線文を施す。時期は弥生時代前期初頭と考えられる。163は内外面をハケ調整する。

164～166は弥生土器の壺である。164は底部～体部である。外面をミガキ調整する。165は頸部である。外面に突帯3条が見られ、ハケ調整をする。166は口縁部～頸部である。口縁端部を鈍く上下に肥厚させ、刻目文を施す。外面をハケ調整、内面をハケ後ナデ調整する。

埋没時期は出土遺物が信里編年中期Ⅱ-1に位置づけられ、弥生時代中期前葉頃と考えられる。SR01から弥生時代中期前葉～中期中葉の土器が多量に出土していることから、埋没から間もない時期にSR01が開削されたと考えられる（信里2002、2005）。

その他の層位や表採した遺物（第17図）

167は第15層から出土した弥生土器の鉢である。全体的に摩滅している。弥生時代前期後半頃と推測される。

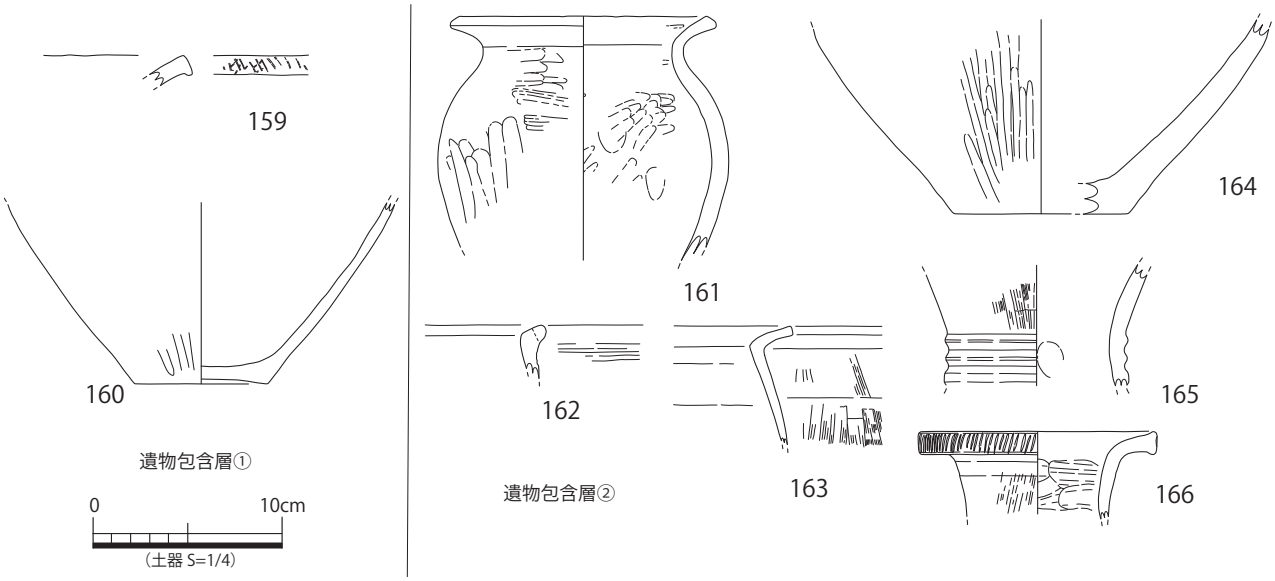
168～171は表採した弥生土器である。168は壺の口縁部である。口縁端部と内面上部に凹線文を施す。169～171は甕である。169は口縁端部で上下に摘み出し肥厚させ、凹線文を施す。170は口縁部～体部である。口縁は別の粘土を貼り付け成形している。口縁端部に刻目文を施す。171は甕と考えられる体部である。内外面にハケ、ミガキ調整する。

第4節　寄贈資料と調査区周辺の遺跡分布について

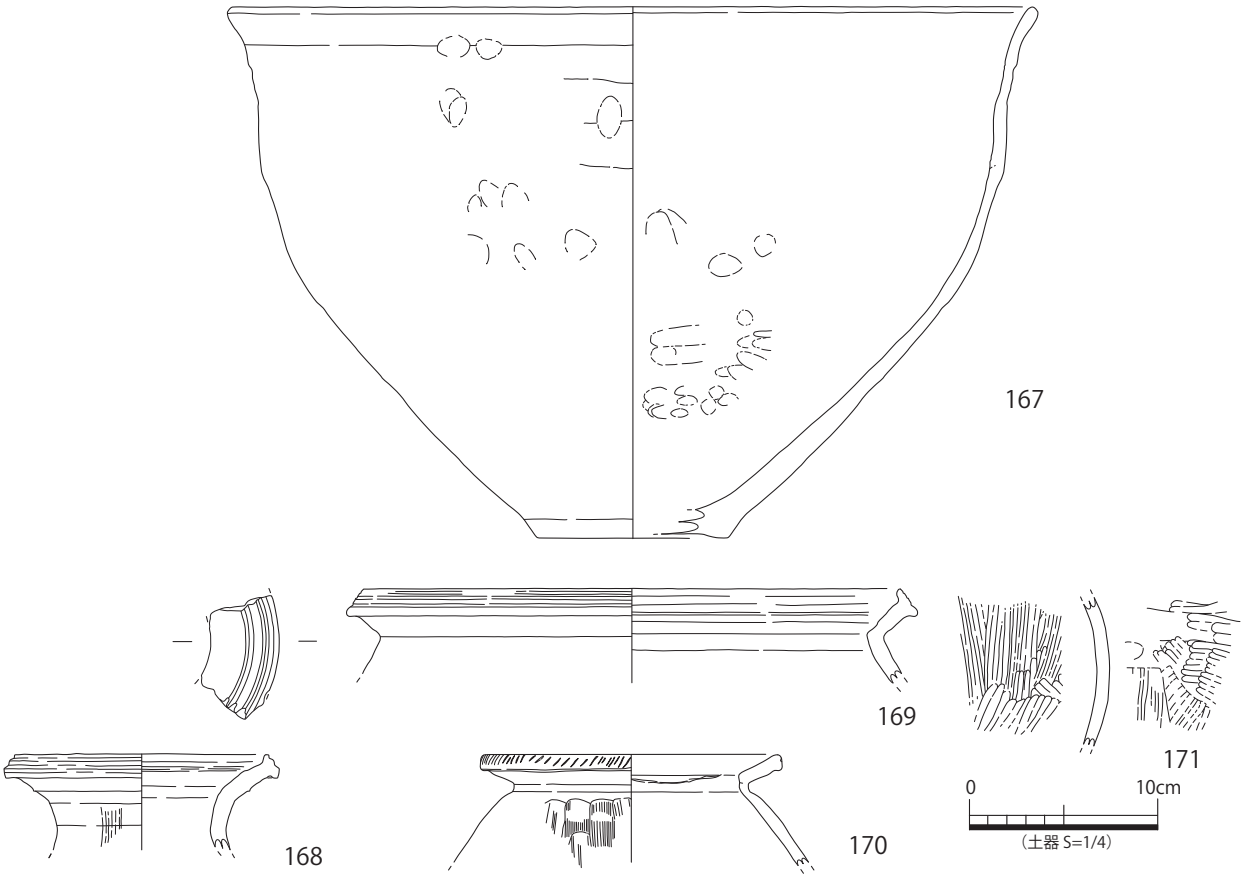
本節では市民からの寄贈資料、水抜きにより奥ノ池遺跡の踏査が実施できたためその踏査状況について紹介し、奥ノ池遺跡の状況について提示したい。

まず寄贈資料であるが、いずれも表採資料で明確な採取地は不明であるものの、遺物の注記から奥ノ池遺跡で採取されたものである（第18図）。172・173は須恵器又は備前焼である。172は甕の頸部でナデ、叩き整形後、カキ目を施す。内面に青海波文が見られる。173は鉢と考えられ、口縁部である。174は備前焼の甕の口縁部である。

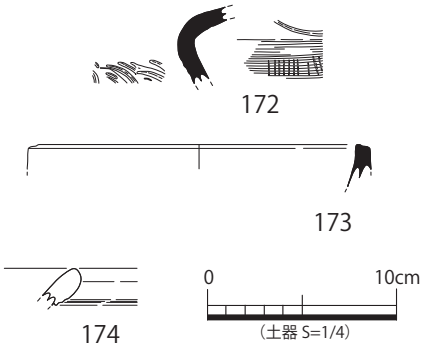
分布調査では古墳の石室の基底部と推測される石積みが確認できた（写真1）。位置は奥の池底北端部（第1図の奥ノ池遺跡内に茶色丸で示している位置）である。周辺にはこれまでの分布調査によって明らかに



第16図　遺物包含層①・②出土遺物



第 17 図　その他の層位・表採遺物



第 18 図　寄贈資料実測図

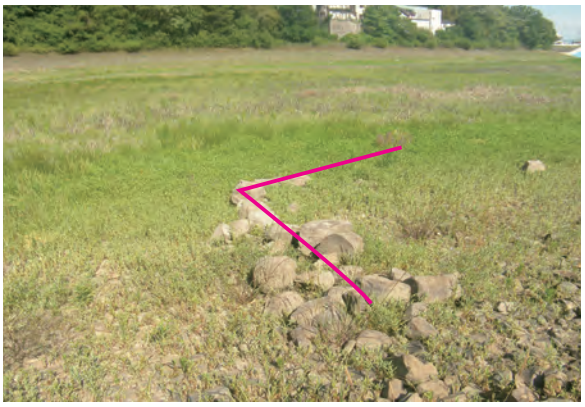


写真 1　奥ノ池遺跡内の石組確認状況

なっている奥ノ池古墳群が点在しており、未発見の古墳である可能性も考えられる。現時点では断定できる根拠はないが今後の調査等で明らかにする必要があると考える。

＜引用・参考文献＞

信里芳紀　2002「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相」『弥生時代前期末・中期初頭の動態』古代学協会四国支部

信里芳紀　2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－凹線文期を中心に－」『研究紀要Ⅰ』香川県埋蔵文化財センター

第４章　自然科学分析

第１節　奥ノ池遺跡出土木製品等の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

1. 試料

試料は高松市に所在する奥ノ池遺跡（SR01）から出土した木製品や自然木の４点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面)、柾目（放射断面)、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（広葉樹３種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節(Sect. Prinus Loudon syn. Diversipilosae, Dentatae)

(152)

環孔材である。木口では大道管(～380μm)が年輪界にそって１～３列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小道管が単独あるいは２～３個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

２）マメ科サイカチ属サイカチ（Gleditsia japonica Miquel）

(154)

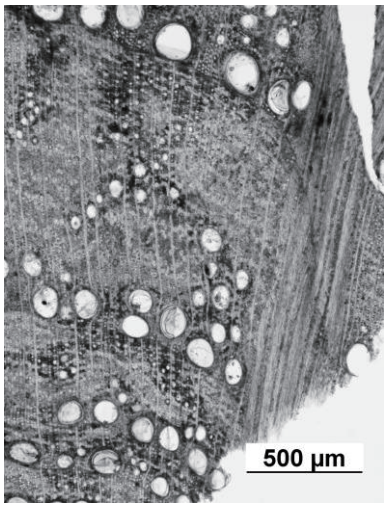
環孔材である。木口では大道管（～320μm）が数列で孔圏部を形成している。孔圏外では道管は散在状、紋様状、集団状に分布している。柾目では道管は単穿孔を有し、小道管はさらに螺旋肥厚を有する。道管内には着色物質がある。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は１～８細胞列、高さ～1.5mmからなる。サイカチは本州（中南部)、四国、九州に分布する。

３）ブナ科コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）

(155、自然木)

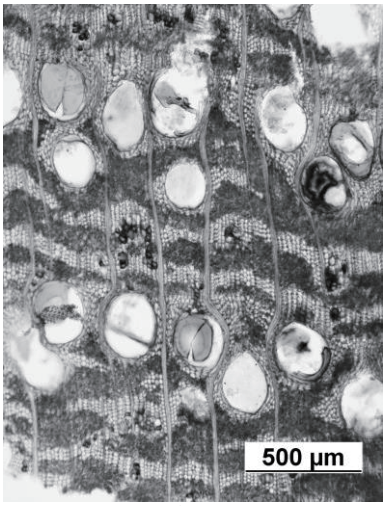
放射孔材である。木口では年輪に関係なくまちまちな大きさの道管（～200μm）が放射方向に配

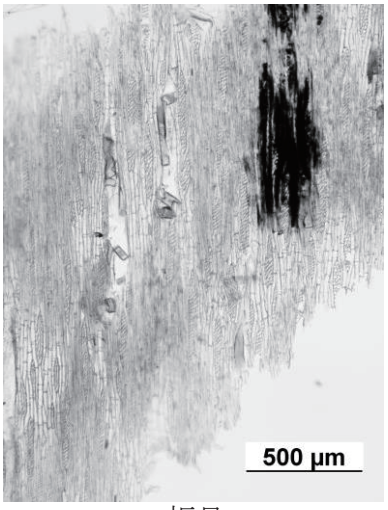
列する。軸方向柔細胞は接線方向に１～３細胞幅の独立帯状柔細胞をつくっている。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と多数の壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり、時々上下縁辺に方形細胞が見られる。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と放射柔細胞の塊の間に道管以外の軸方向要素が挟まれている集合型と複合型の中間となる型の広放射組織が見られる。アカガシ亜属はイチイガシ、アカガシ、シラカシ等があり、本州（宮城、新潟以南）、四国、九州、琉球に分布する。



木口　　柾目　　板目

152　ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節

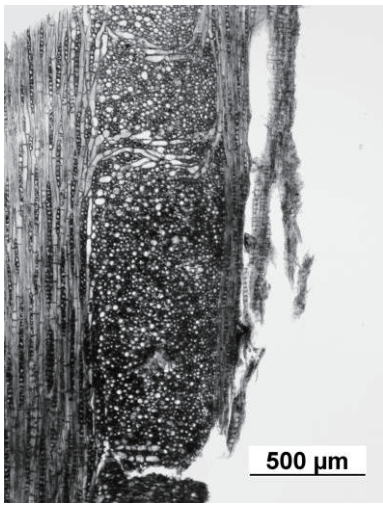




木口　　柾目　　板目

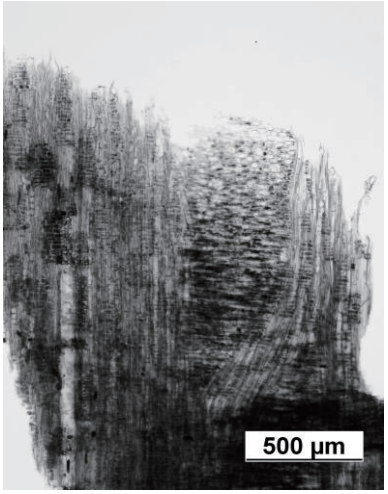
154　マメ科サイカチ属サイカチ

写真２　樹種同定断面写真①



木口　　柾目　　板目

155　ブナ科コナラ属アカガシ亜属



木口　　柾目　　板目

自然木　　ブナ科コナラ属アカガシ亜属

写真３　樹種同定断面写真②

〈参考文献〉

林 昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所（1991）

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）

伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）

北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 27 冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)

奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第 36 冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1

第２節　奥ノ池遺跡出土品に付着する赤色顔料の分析報告

徳島県立博物館　植地岳彦

1. 調査の目的

香川県高松市奥ノ池遺跡からの出土土器に、赤色顔料が付着している資料が確認された。本調査の目的は、資料に付着する赤色顔料の元素分析を実施して、赤色顔料の材質調査を行い、顔料の種類を識別することである。

2. 資料

調査対象としたのは、奥ノ池遺跡出土土器 21 点である。内訳は高松市教育委員会より提示され、赤色顔料が付着する土器 7 点、赤色顔料が不明瞭などで確認が必要な土器が 8 点、赤色顔料であるかどうか確認が必要な土器 6 点である。

3. 調査方法

蛍光エックス線分析法で赤色顔料の定性分析を行い、顔料の識別を行う。また、簡易型のマイクロスコープを用いて赤色が顔料によるものかどうかについても検討する。

(1) 蛍光エックス線分析法による元素の定性分析と定量分析

①装置

セイコーインスツルメンツ株式会社（現セイコーインスツル株式会社）製　蛍光エックス線分析計 SEA2010L　設置場所：徳島県立埋蔵文化財総合センター

②測定条件

電圧：15kV・50kV で 2 回調査

電流：有効測定時間が測定時間（100 秒）の 70%になるよう自動設定

測定時間:100 秒(有効測定時間は、70 秒程度、それを 15kV と 50kV の 2 回実施するので、測定時間は 200 秒、有効測定時間は 140 秒程度となる)

大気状態：真空（減圧）

③定性分析・定量分析

赤色顔料の材質調査が目的のため、次のように定性分析、定量分析を行った。

１．定性分析で、Hg（水銀）の同定を試みた。

２．定性分析で Si（ケイ素）、Fe（鉄）、Zr（ジルコニウム）、Sr（ストロンチウム）、Ti（チタン）、Mn（マンガン）、Rb（ルビジウム）、Zn（亜鉛）を同定し、ファンダメンタルパラメーター法による定量分析で、それぞれの元素の大まかな量を確認した。

(2) 拡大観察による付着状況の観察

赤色顔料の付着状況観察のため、実体顕微鏡および簡易型のデジタルマイクロスコープを用いて拡大観察を行った。

4. 調査結果 （第 2 表）

（1）赤色顔料の種類

今回の分析結果ではすべての調査資料から水銀元素を検出しなかった。このことから、赤色の要因は水銀朱ではないことが分かった。3 と 8 がベンガラを使用したと考えられる。その他の資料は土器胎土に多量に含まれる Fe が赤色に発光したと考えられる。

(2) 土器胎土の特徴について

調査対象資料の、赤色物質が付着していない「胎土」の部分を蛍光エックス線分析法によって調査すると Si と Zr が強く検出される「A グループ」(3、28、32、36、93、168、171) と、Fe が強く検出される「B グループ」(8、34、40、53、57、54、70、72、101、105、107、120、134、135) を確認した。

A グループと B グループの外見上の違いは、A グループは胎土が白っぽく、赤色物質はその上を覆うように付着している。B グループは胎土が茶色で、赤色物質はその中に混じるような「B1 グループ」) と、A グループと同様胎土が白っぽいが、Fe が多い「B2 グループ」(34、53、107) に分かれる。

B1 グループは、胎土の一部が被熱で赤く発色したようで、土器製作時に赤く発色させることを意図していたとは考えにくい。A・B2 グループは、土器の表面を整える粘土層が赤く発色しているものが多い。赤い発色を意図して、鉄を多く含む粘土を利用した可能性がある。

まとめ

今回の調査では、Hg が検出される資料はなく、土器表面で確認された赤色物質は、Fe に由来する可能性が高い。しかしながら、Fe は土器そのものに多量に含まれていることから、Fe の検出だけでは顔料として赤色物質が付着しているとは断定できない。拡大観察等によっても赤色顔料を「塗った」ことを認定することは困難で、3 と 8 の 2 点のみベンガラ使用の可能性を指摘した。現状では、土器の製作（焼成）時の加熱で赤く発色したと考えられる資料が多く、赤彩が意図的であるか検討することが重要であろう。

本調査に当たっては、徳島県未来創生文化部文化資源活用課の協力により徳島県立理埋蔵文化財総合センターの蛍光エックス線分析装置を使用した。記して謝意を表する。

第２表　赤色顔料分析結果

調査時の分類	報文番号	赤色部分、胎土の様子	グループ	調査位置1	調査位置2	Si（ケイ素）	Fe（鉄）	Zr（ジルコニウム）	Sr（ストロンチウ）	Ti（チタン）	Mn（マンガン）	Rb（ルビジウム）	Zn（亜鉛）	総計
赤色顔料が付着しているもの	3	白っぽい胎土	A	胎土部分	体部内面	57.49	33.62	1.78	1.28	1.97	2.03	0.33	1.51	100
		白っぽい胎土表面、周囲より低くなる位置に赤色が残存		赤色部分	体部外面	43.06	49.56	1.98	1.16	0.75	2.17	0.25	1.08	100
	8	茶色の胎土	B1	胎土部分	口縁部上端	32.98	58.35	1.28	1.87	1.11	2.83	0.03	1.55	100
				胎土部分	口縁部端部	31.04	59.35	0.69	1.82	0.54	2.76	0.29	3.5	100
		茶色の胎土、端部の周囲よりくぼんだ場所に赤色が残存		赤色部分	口縁部上端	35.08	56.66	0.89	2.35	0	2.89	0.15	1.99	100
	28	白っぽい胎土に赤色強い層	A	赤色部分	口縁部～体部外面	43.6	43.69	2.58	1.86	1.16	2.29	0.79	4.03	100
		白っぽい胎土に赤色強い層		赤色部分	口縁部～体部上面	46.03	43.23	2.76	1.75	1.08	2	0.5	2.64	100
		白っぽい胎土		胎土部分	口縁部～体部外面	44.11	45.32	2.27	1.8	0.97	2.53	0.76	2.24	100
	34	白っぽい胎土で外面は赤色層及びススの付着	B2	赤色部分	口縁部外面	28.71	62.45	1.15	1.32	0.56	2.69	0	3.11	100
				黒色部分	口縁部外面	25.53	66.12	0.82	1.18	0.67	2.67	0.34	2.66	100
				赤色部分	口縁部内面	30.56	57.04	1.71	1.32	0.78	2.58	0.25	5.75	100
				胎土部分	口縁部内面	30.62	60.85	0.95	1.62	0	2.95	0.27	2.74	100
	72	赤茶色の胎土で、その上層に強い赤色	B1	赤色部分	口縁部端部	30.74	61.5	1.27	1.15	1.46	2.55	0.01	1.33	100
		赤茶色の胎土		胎土部分	口縁部上面	30.76	61.47	1.03	1.28	1.08	2.42	0.23	1.73	100
				胎土部分	口縁部下面	27.44	65.13	1.06	1.01	0.99	2.72	0.24	1.4	100
	120	茶色の胎土に、強い赤色と、炭付着	B1	赤色部分	口縁部～体部外面	26.71	65.49	1.05	1.25	0.38	3.03	0.15	1.94	100
				胎土部分	口縁部～体部外面	26.18	67.07	0.76	1.3	0	2.65	0.04	2.01	100
				胎土部分	口縁部～体部内面	25.9	67.13	0.78	1.09	0.52	2.83	0.12		98.37
	134	茶色の胎土に、強い赤色と、炭付着	B1	赤色部分	体部外面	26.1	63.98	1.35	1.92	1.54	3.25	0.16	3.32	101.63
				胎土部分	体部外面	26.94	64.79	1.17	1.8	0.71	3.02	0.07	1.5	100
				胎土部分	体部内面	26.82	62.05	1.86	2.05	0	2.67	0.19	4.36	100
赤色顔料が不明瞭などで確認が必要なもの	32	白っぽい胎土に、強い赤色と、炭付着	A	赤色部分	口縁部～頸部口縁部外面	64.46	28.17	3.26	1.41	0.43	0.97	1.12	0.17	100
				胎土部分	口縁部～頸部口縁部外面	57.29	34.62	3.34	1.59	0.22	1.89	1.05	0	100
	53	白っぽい胎土の上層に赤色層	B2	赤色部分	体部内面	39.64	51.42	3.04	1.28	1.13	2.38	0.75	0.36	100
		白っぽい胎土		胎土部分	体部内面	37.98	53.5	3.18	1.31	0.7	2.59	0.75	0	100
	54	茶色の胎土に赤色、炭	B1	赤色部分	体部外面	26.53	62.24	2.85	2.68	1.13	2.69	0.16	1.72	100
		茶色の胎土		胎土部分	体部内面	29.66	59.22	2.41	2.57	1.04	2.62	0.46	2.03	100
	70	茶色の胎土に赤色	B1	赤色部分	口縁部～頸部外面	26.15	67.04	0.99	1.28	0.99	2.75	0.34	0.46	100
		茶色の胎土		胎土部分	口縁部～頸部内面	20.55	73.67	1.02	1.22	0.24	3	0.24	0.06	100
	93	白い胎土に茶色の層	A	茶色部分	体部外面	58.42	32.48	2.71	1.19	0.99	1.92	2.28	0.01	100
				茶色部分	体部内面	54.97	35.02	3.05	1.21	0.67	2.43	2.57	0.07	100
	101	茶色の胎土、茶色の表層、赤色	B1	赤色部分	口縁部外面	27.64	64.87	1.35	1.58	0.81	3.13	0.34	0.27	100
		茶色の胎土、茶色の表層、赤色		胎土部分	口縁部内面	31.76	61.65	1.26	1.76	0.6	2.71	0.23	0.02	100
	107	白っぽい胎土、凸部に赤色層	B2	赤色部分	頸部外面	27.19	65.35	1.78	2.1	0.13	3.2	0.2	0.04	100
		白っぽい胎土		胎土部分	頸部内面	27.8	63.28	1.8	2.13	1.43	3.39	0.15	0.02	100
	168	白っぽい胎土、赤色の表層、内部黒色	A	赤色部分	口縁部端部	46.37	41.8	4.7	2.57	1.29	2.1	0.73	0.45	100
				胎土部分	口縁部内面	48.6	41.12	4.06	2.47	1.4	1.73	0.59	0.01	100
赤色顔料かどうか確認が必要なもの	36	白っぽい胎土、凸部に赤色	A	赤色部分	口縁部上面	43.97	49.11	2.17	1.2	0	2.33	1.21	0.01	100
				赤色部分	口縁部端部	45.57	45.08	2.77	1.75	0.85	1.84	1.45	0.7	100
		白っぽい胎土		胎土部分	口縁部下面	46.53	44.07	2.92	1.57	0.43	2.37	1.31	0.8	100
	40	茶色の胎土、赤色	B1	赤色部分	口縁部端部	22.07	69.19	1.85	2.95	0	2.97	0.44	0.53	100
				赤色部分	口縁部上面	28.89	62.04	1.91	2.52	0.98	2.73	0.48	0.44	100
	57	茶色の胎土、スス付着、くぼみに赤色粒子	B1	茶色部分	体部外面	29.49	63.39	1.28	1.74	0.67	2.76	0.29	0.38	100
				胎土部分	体部外面	28.69	63.39	1.09	1.87	0.56	3.17	0.42	0.81	100
	105	茶色の胎土、赤色層	B1	赤色部分	頸部外面	25.18	68.28	1.48	1.74	0	3.28	0.01	0.03	100
		茶色の胎土		胎土部分	頸部内面	32.47	58.63	2.49	2.31	0.03	3.04	0.44	0.58	100
	135	茶色の胎土に赤色粒子	B1	赤色部分	体部内面	22.9	69.6	1.27	1.75	0.35	3.08	0.37	0.67	100
		茶色の胎土に炭		胎土部分	体部外面	24.83	67.17	1.31	2.67	0	3.23	0.13	0.66	100
	171	白っぽい胎土、黒斑、茶色	A	赤色部分	体部外面	54.96	31.86	4.32	2.99	2.3	1.78	1.5	0.3	100
				胎土部分	体部外面	49.38	37.62	4.51	2.39	2.49	1.45	1.29	0.88	100

〈参考文献〉

市毛勲　1998 『朱の考古学 新版』雄山閣

市毛勲　2016 『朱丹の世界』考古学ハンドブックス 14　ニュー・サイエンス社

植地岳彦　2004「大柿遺跡出土遺物に付着する赤色物質の調査（２）」『大柿遺跡Ⅱ』

植地岳彦　2017「館蔵品紹介　辰砂が宿る岩石―若杉山遺跡発掘資料―」『博物館ニュース 109 号』徳島県立博物館

徳島県教育委員会　2016 『赤色顔料生産遺跡及び関連遺跡の調査　採掘遺跡　石器編』徳島県教育委員会

徳島県教育委員会　2017 『赤色顔料生産遺跡及び関連遺跡の調査　採掘遺跡　土器編』徳島県教育委員会

徳島県教育委員会他　2002『矢野遺跡（Ⅰ）』徳島県教育委員会

徳島県立博物館　1997『辰砂生産遺跡の調査－徳島県阿南市若杉山遺跡－』徳島県立博物館

成瀬正和　1998「縄文時代の赤色顔料Ⅰ―赤採土器―」『月刊考古学ジャーナル№.438』ニュー・サイエンス社

第5章　まとめ

第1節　主な遺構・遺物

・弥生時代中期前葉以前

調査区東側の遺物包含層②が該当する。弥生時代前期末頃の土器も出土するが、中期初頭頃の土器類が多い。また、遺物包含層②を被覆する第15層からも、弥生時代前期末～中期初頭と推測される167が出土している。このことからSR01の初源と大きな時間差はなく、遺物包含層②が形成後にそれ程時間を置かずにSR01が開削されたと考えられる。

・弥生時代中期前葉～中葉

当該期に属するのはSR01とSX01である。SR01からは弥生時代前期末～中期初頭の土器も出土しているが、中期前葉～中期中葉の土器類が多くを占め、この頃に埋没が進行したと考えられる。13・71等の中期後葉頃と考えられる土器がわずかに出土しており、最終埋没時期はこの時期と考えられる。SX01も出土遺物から中期前葉～中期中葉と考えられる。出土遺物がなく正確な時期を特定できないが、SD01・02、SP01は埋土がSX01と類似することや、遺物包含層①が弥生時代中期後葉以降と考えられることから、埋没時期は同時期前後と推測される。

第2節　弥生時代中期前葉～中期中葉の土器について

1）出土遺物の胎土・焼成について

今回の調査ではSR01を中心に当時期の遺物が多く出土している。目視による胎土や焼成の状況によって分類が可能と考えられることから､その傾向について概観したい。胎土や焼成で主に3種類に分類する。胎土①・②・③と呼称し、今回出土した土器の多くが提示する分類に当てはまる。

胎土①は、色調が褐色系で石英や角閃石等を含むいわゆる香東川下流域産土器である。胎土②は、色調が明橙褐色や明赤褐色等の赤褐色系で、胎土に1～3㎜程度の石英や赤色粒・白色粒等の粒子を多量に含むのが特徴である。そのため、現状で表面がざらっとした質感になるものが多い。胎土③は、色調が灰黄色や浅黄色等の灰白系で、胎土に1～2㎜程度の赤色粒・白色粒を含む。一例であるが、これらの胎土に当てはまるのは胎土①が7、123、142、157、169等（第4章第2節赤色顔料分析のB1グループ）、胎土②が12、30、69、97、129等（同B1グループ）、胎土③が33、36、95、103、166等（同A、B2グループ）である。これらの特徴をもつ土器類は高松平野の遺跡で多く出土しており、在地の土器と考えられる。

また、これらの胎土は高松市内の同時期に位置する北山浦遺跡（SX07･08等）やさこ･長池遺跡（SR01）[(1)]でも多く確認できる。特に数値化はしていないが、北山浦遺跡では胎土①（SX07/249・256等）や胎土②（SX07/263・264等）の割合が高く、さこ・長池遺跡では胎土③（SR1第70図-50等）の割合が高い。奥ノ池遺跡では胎土①～③は上記の遺跡に比べ、偏りが見られないのが特徴である。

胎土①～③の特徴に当てはまらない土器は、23・34・101・161 等が挙げられる。これらの土器は後述するように、他地域で生産された可能性のある土器群である。

2） 他地域の土器について

前述した胎土・焼成の分析で在地産の土器が多数出土している一方、胎土や焼成、文様面から異質な土器類がわずかであるが存在している。これらは他地域系（産）の可能性があり、概観したい。

まず、23・34・101 は色調が灰黄褐色系で胎土が 1 ㎜以下の白色粒をわずかに含む程度の精良な土器群である。器形も 23 は讃岐地域で見られないプロポーションである。161 は色調が灰色で、胎土が白色粒や赤色粒をわずかに含む程度で精良である。プロポーションも讃岐地域で見られない。

5 の壺は口縁部の形状や内面の加飾状況から、伊予東部の影響を受けた可能性がある。胎土が胎土②の特徴に類似することから、在地で生産された模倣品の可能性がある。

6 は文様の施文状況やプロポーションから、備前や播磨地域の要素を含んだものである。プロポーションがこれまで備前や播磨地域で発見されたものとは若干異なり、島嶼部で生産されたものから影響を受けた可能性がある。

25 の短頸広口壺は貼付突帯や棒状浮文の加飾傾向から、播磨地域の影響を受けたものと推測される。例として模倣品であるが、同時期に播磨地域の影響を受けたものが多肥松林遺跡から出土している（信里 2005・山下 1999）。

3） 赤色顔料付着の土器

赤色顔料に関しては蛍光 X 線による分析の結果、2 点（3・8）確認し、いずれもベンガラであることが明らかになった。年代が分かるものは 3 で弥生時代前期の壺である。

第 3 節　流路跡の復元と周辺遺跡との関連

今回の調査で確認した SR01 は西ハゼ土居（NR01）、松並・中所遺跡（SR01・SR03）に延伸する可能性について述べたい [(2)]。

まず、西ハゼ土居遺跡の第Ⅰ区で検出した NR01（西）は弥生時代前期末の土器を含んでおり、この頃には開削したと考えられている。今回の調査で検出した SR01（奥）は遺構の検出順序から弥生時代中期前葉頃と考えられるが、延伸方向の整合性、西ハゼ土居遺跡でも弥生時代中期前葉頃の土器類を含むことから、西ハゼ土居 NR01 に延伸すると考えられる。また、NR01（西）は中期後半には埋没し、水田利用される。SR01（奥）でも中期後半の遺物はほとんど出土していないことから、周辺地域で一斉に埋没が進行したと考えられる。また、西ハゼ土居遺跡は弥生時代終末期以降から古代・近世にかけて NR02 ～ 09（西）の流路跡を検出しているが、弥生時代後期以降の遺構・遺物を確認しておらず、これらの流路跡は別源の導水元からによるものと推測される。

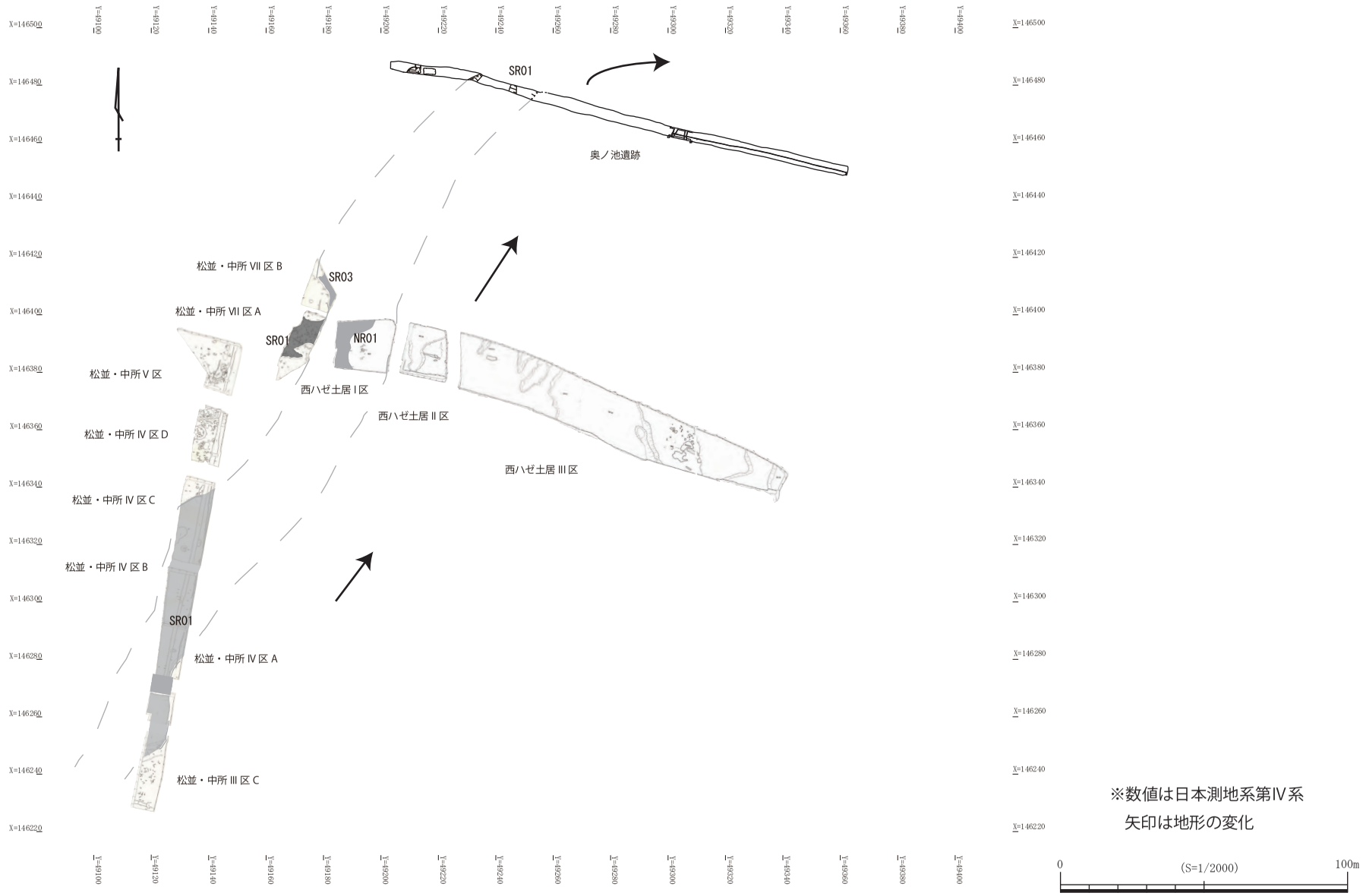
さらにこの流路跡は、松並・中所遺跡の第Ⅳ区、第Ⅶ区 A・B で検出した SR01・03（松）に延伸すると考えられる。北側の SR03（松）は中期末ごろに位置付けられているものであるが、延伸方向の整合性や出土遺物に中期前葉～中葉も含む可能性もあるから、NR01（西）に延伸すると推測される。また、SR01（松）も延伸方向の整合性や同一時期の遺物が出土することから、これに延伸すると考えられる。

以上をまとめると第 19 図のように流路跡が復元できると推測される。復元に関して、西ハゼ土居遺跡では NR01（西）の上面に流路跡と考えられる堆積層を確認していると報告されていることから、第 19 図のように第Ⅰ調査区東端まで復元している。松並・中所遺跡は報告書で確認できた範囲で復元しているが、第Ⅶ区の上面は後世の攪乱で削平されており、本来の流路の形状や土層堆積を把握することは困難であったことから [(3)]、第Ⅶ区Ａまで流路が広がった可能性もある。いずれにしても、今回の調査で検出した SR01（奥）が NR01（西）、SR01・03（松）と一連の遺構であると考えられる。

前述した基本土層や遺構の説明で、元来より奥ノ池遺跡の地形が西から東に向けて下がるように傾斜していることが明らかになっている。現在も池の取水口（第 2 図）が池の東側に位置しており、弥生時代中期の段階からこの傾斜は存在したと考えられる。一方で、SR01（奥）の検出位置は約 12.0 ｍで SR01（松）では約 13.5 ｍであり、この傾斜を考慮すると南から北に向かって流れたと考えられる。整理すると松並・中所遺跡から奥ノ池遺跡にはおよそ南から北に向かい傾斜するが、奥ノ池遺跡周辺からは西から東に向かい傾斜が変化すると考えられる。

また、調査区が狭小であるため積極的な評価は難しく他の遺跡で同様の構造物を確認できていないが、今回の調査で護岸等によるものと考えられる杭も検出していることから、灌漑等の役割を持った流路跡である可能性がある。

周辺地域で弥生時代中期前葉～中期中葉にかけての遺跡は北山浦遺跡が挙げられる。立地的には当遺跡と離れているため、この時期の集落が北山浦遺跡周辺と奥ノ池遺跡周辺とに別々で存在した可能性がある。今回の調査で建物跡が検出されなかったことや西ハゼ土居遺跡や松並・中所遺跡でこの時期の遺構が希薄であることから、当地から山際に近い場所に集落が形成された可能性が推測できる。



第 19 図　流路跡復元図 (S=1/2,000)

＜註＞

(1) さこはこおりへん「⺾」に谷である。

(2) 各遺跡の流路跡を奥ノ池遺跡の流路跡をSR01（奥）、西ハゼ・土居遺跡の流路跡をNR01（西）、松並・中所遺跡の流路跡をSR01（松）と記す。

(3) 松本和彦氏の御教示による。

＜引用・参考文献＞

大久保徹也編　1995『上天神遺跡』香川県教育委員会

大嶋和則　2005『西ハゼ土居遺跡』高松市教育委員会

信里芳紀　2002「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相」『弥生時代前期末・中期初頭の動態』古代学協会四国支部

信里芳紀　2005「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－凹線文期を中心に－」『研究紀要Ⅰ』香川県埋蔵文化財センター

松本和彦　2000『松並・中所遺跡』香川県教育委員会

真鍋昌宏　2000「讃岐地域」『弥生土器の様式と編年－四国編－』木耳社

渡邊誠　2009『高松市指定史跡　片山池窯跡群　確認調査報告書』高松市教育委員会

渡邊誠ほか　2012『北山浦遺跡』高松市教育委員会

第３表　出土遺物一覧表①

報告書番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
1	SR01第1層	弥生土器	壺	口縁～頸部	(10.4)	―	〔5.2〕	マメツ、ハケ、圧痕文突帯	ナデ、指ナデのち横ナデ	2.5YR4/6赤褐	2.5YR4/6赤褐	普 1mm以下の石英・長石・金雲母・黒雲母含む	良	
2	SR01第1層	弥生土器	壺	体部	―	―	〔5.15〕	ナデ、列点文2条、ミガキ	粗いハケ	7.5YR4/4褐	10YR5/3にぶい黄褐	普 2.5mm以下の石英・長石・角閃石・赤色粒含む	良	
3	SR01第1層	弥生土器	壺	体部	―	―	〔4.1〕	ナデ、ヘラミガキ、沈線2条、斜線文	ナデ	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR7/3にぶい橙	普 2mm以下の石英・長石含む	良	外面赤色顔料あり
4	SR01第1層	弥生土器	甕	口縁部	(13.2)	―	〔4.55〕	凹線文3条、横ナデ、一部マメツ	横ナデ、指頭圧痕、ケズリ？、一部マメツ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	粗 5mm以下の赤色粒・3mm以下の長石・2mm以下の石英含む	良	
5	SR01第2層	弥生土器	壺	口縁部	(16.2)	―	〔2.2〕	ナデ、マメツ、凹線文4条	簾状文4条、ナデのち斜格子文、穿孔9ヶ所	2.5Y2/1黒	7.5YR5/3にぶい褐	普 2mm以下の石英・長石含む	良	煤付着
6	SR01第2層	弥生土器	壺	口縁～頸部	(30.3)	―	〔13.7〕	突帯に化粧土を貼って円形浮文（中央に竹管文）と櫛描沈線6条、爪先圧痕、縦ハケのち横ナデ、突帯7条、刻目文	横ナデ、波状文、横ナデのち指ナデ	10YR4/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	普 1mm以下の石英・長石・赤色粒・黒雲母含む	良好	
7	SR01第2層	弥生土器	壺	口縁部	(14.0)	―	〔4.8〕	斜格子文、ナデ、横ナデ、縦横のミガキ	ミガキのち横ナデ、マメツ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	普 2.5mm以下の白色粒・黒色粒・角閃石含む	良	
8	SR01第2層	弥生土器	壺	口縁部	(14.0)	―	〔2.3〕	ナデ、列点文	ナデ	7.5YR4/3褐	10YR5/3にぶい黄褐	普 2.5mm以下の石英・長石・白色粒・角閃石含む	良	内・外面赤色顔料あり
9	SR01第2層	弥生土器	壺	底部	―	11.3	〔6.6〕	板ナデのちナデ	ミガキ後ナデ	10YR4/3にぶい黄褐～10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐、7.5YR4/4褐	粗 4mm以下の石英・2mm以下の白色粒・長石を多く含む	良	内面に煤少量付着、外面体部～底部にかけて黒斑あり
10	SR01第2層	弥生土器	壺	体部	―	―	〔4.65〕	重弧文	マメツ	10YR6/2灰黄褐	2.5Y6/2灰黄	普 2.5mm以下の石英・長石・赤色粒・角閃石含む	良	
11	SR01第2層	弥生土器	壺	体部	―	―	〔7.95〕	ハケ、ナデ、ミガキ	板ナデ、絞り目	10YR5/2灰黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	普 2.5mm以下の石英・長石・赤色粒含む	良	外面に黒斑あり
12	SR01第2層	弥生土器	甕	口縁～体部	―	―	〔7.2〕	ナデ、マメツ	ナデ、マメツ	2.5YR5/6明赤褐	2.5YR5/4にぶい赤褐	普 3mm以下の石英・長石含む	良	
13	SR01第2層	弥生土器	甕	口縁～体部	―	―	〔6.3〕	横ナデ、ハケ、凹線文2条	横ナデ、ハケ、指ナデ	7.5YR5/2灰褐	10YR5/1褐灰	普 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良	
14	SR01第2層	弥生土器	甕	口縁部	―	―	〔4.7〕	横ナデ、ハケ	横ナデ、ナデ	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR6/3にぶい褐	普 1～3mm大の石英・長石多く含む	良	
15	SR01第2層	弥生土器	甕	口縁部	(35.2)	―	〔4.0〕	横ナデ、ハケ	横ナデ、ミガキ	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	普 2mm以下の長石・3mm以下の赤色粒・1mm以下の角閃石含む	良	
16	SR01第2層	弥生土器	甕	口縁部	―	―	〔2.6〕	ナデ、刻目文	ナデ	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	普 4mm以下の石英・長石含む	良	
17	SR01第2層	弥生土器	甕	体部	―	―	〔7.5〕	ミガキ	ミガキ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR5/2灰黄褐	普 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良	内面にコゲ
18	SR01第2層	弥生土器	甕	体部	―	―	〔7.1〕	ハケ？、マメツ	ナデ、ハケ？、マメツ	5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	普 4.5mm以下の石英・長石・赤色粒・角閃石含む	良	
19	SR01第2層	弥生土器	甕	底部	―	6.0	〔5.2〕	ミガキ、ナデ	ナデ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	普 3mm以下の石英・長石含む	良	内面接合痕、黒斑あり
20	SR01第2層	弥生土器	甕	底部	―	(7.8)	〔6.3〕	ミガキ	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR2/1黒	普 3mm以下の石英・長石含む	良	内面全体にコゲ付着
21	SR01第2層	弥生土器	甕	底部	―	6.0	〔3.1〕	ナデ、ミガキ	ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/1褐灰	普 3mm以下の石英・2mm以下の長石・角閃石含む	良	
22	SR01第2層	弥生土器	鉢	底部～体部	8.8	―	〔6.25〕	マメツ	ハケのち表面マメツ、指頭圧痕	5YR6/4にぶい橙	7.5YR5/2灰褐	普 2mm以下の長石・3mm以下の石英・2mm以下の金雲母・黒色粒含む	良	接合痕あり、穿孔4箇所（側面から上面にかけて）
23	SR01第2層	弥生土器	高杯	脚部～坏部	―	(9.0)	〔5.4〕	ナデ、工具痕、ミガキ	ヘラミガキのちナデ	10YR5/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	精良 1mm以下の石英・長石・赤色粒	良	
25	SR01第3層	弥生土器	短頸広口壺	口縁～体部	(15.2)	―	〔14.7〕	斜格子文、刻目突帯文6条、櫛描波状文、櫛描直線文、棒状浮文、ミガキ	指頭圧痕、ナデ	10YR5/1褐灰	10YR6/3にぶい黄橙	普 2mm以下の長石・石英・黒雲母含む	良	
26	SR01第3層	弥生土器	短頸広口壺	口縁～頸部	―	―	〔6.9〕	横ナデ、ハケ	横ナデ	10YR4/1褐灰	10YR6/3にぶい黄橙	普 4mm以下の石英・長石・雲母含む	良	
27	SR01第3層	弥生土器	短頸壺	口縁部	―	―	〔3.9〕	櫛描直線文	ナデ、ミガキ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR6/2灰黄褐	普 3mm以下の石英・長石・雲母・赤色粒含む	良	

第４表　出土遺物一覧表②

報告書番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
28	SR01第3層	弥生土器	広口壺	口縁部	—	—	〔3.05〕	櫛描斜格子文、ナデ、マメツ、剥離、穿孔2ヶ所	ナデ、マメツ	10YR5/2灰黄褐	10YR4/1褐灰	粗 3.5㎜以下の石英・長石含む	良	
29	SR01第3層	弥生土器	壺	口縁～頸部	(12.7)	—	〔7.2〕	指頭圧痕、ナデ	ナデ、指頭圧痕	10YR6/2灰黄褐	10YR6/1褐灰	粗 3㎜以下の石英・長石含む	良	
30	SR01第3層	弥生土器	壺	口縁～頸部	(24.7)	—	〔6.4〕	ナデ、圧痕文突帯、横ナデ	ナデ、横ナデ	10YR6/3にぶい黄橙～5YR4/6赤褐	10YR4/4褐	普 0.1～5㎜大の石英・長石・黒雲母含む	良	
31	SR01第3層	弥生土器	壺	口縁～頸部	(13.0)	—	〔6.4〕	マメツ、横ナデ、圧痕文突帯、ハケ	横ナデ、マメツ、剥離	10YR7/2にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	普 0.5㎜以下の石英・長石含む	良	
32	SR01第3層	弥生土器	壺	口縁～頸部	(14.0)	—	〔5.0〕	横ナデ、ナデのち縦ハケ、貼付突帯、マメツ	横ナデのち指オサエ、横方向のミガキ	10YR7/2にぶい黄橙	10YR6/2灰黄褐	普 0.1㎜～5㎜大の石英・長石・黒色粒多く含む	良	
33	SR01第3層	弥生土器	壺	口縁～頸部	(12.0)	—	〔3.6〕	刻目文、2個1対の穿孔、横ナデ、ナデ、ハケ	横ナデ、ナデ、ハケ	10YR8/3浅黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	普 0.1～0.5㎜大の石英・長石含む	良	
34	SR01第3層	弥生土器	壺	口縁部	(11.2)	—	〔4.9〕	横ナデ、接合痕	指オサエのち横ナデ、指ナデ、接合痕	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/3にぶい褐	精良 0.5㎜以下の石英・長石含む	良好	
35	SR01第3層	弥生土器	壺	口縁部	(9.8)	—	〔3.1〕	横ナデ、刻目文、櫛描直線文、縦ハケ	ナデ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	普 0.1～2㎜大の石英・長石含む	良	
36	SR01第3層	弥生土器	壺	口縁部	—	—	〔2.6〕	斜格子文、横ナデ	横ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	普 1㎜以下の石英・長石・金雲母含む	良	
37	SR01第3層	弥生土器	壺	口縁部	—	—	〔3.9〕	刻目文、横ナデ、圧痕文突帯	マメツ	7.5YR8/4浅黄橙	5YR6/6橙	普 2㎜以下の石英・長石含む	良	
38	SR01第3層	弥生土器	壺	口縁～頸部	—	—	〔6.5〕	圧痕文突帯、刻目文、ハケ、押圧文、ナデ	ナデ	7.5YR8/4浅黄橙	7.5YR8/3浅黄橙	普 3㎜以下の石英・長石含む	良	
39	SR01第3層	弥生土器	壺	口縁部	—	—	〔1.6〕	ナデ、横ナデ、円形浮文	ナデ、横ナデ、円形浮文	10YR4/2灰黄褐、7.5YR4/4褐	7.5YR5/2灰褐	普 3～0.1㎜以下の石英・長石含む	良	
40	SR01第3層	弥生土器	壺	口縁部	—	—	〔3.05〕	ナデ	ナデ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	普 1.5㎜以下の長石含む	良	断面接合痕あり
41	SR01第3層	弥生土器	壺	頸部	—	—	〔7.1〕	ナデ、板ナデ、貼付突帯2条、穿孔4ヶ所	ナデ、重弧文	7.5YR8/1灰白	2.5Y7/2灰黄	粗 3.5㎜以下の石英・長石・赤色粒含む	良	
42	SR01第3層	弥生土器	壺	体部	—	—	〔3.3〕	ハケ、櫛描波状文、櫛描直線文	指オサエ、ナデ	7.5YR5/3にぶい褐	5Y3/1オリーブ黒	普 2㎜以下の石英・長石・赤色粒含む	良	
43	SR01第3層	弥生土器	壺	体部	—	—	〔9.55〕	ハケ、櫛描直線文、櫛描波状文	指オサエ、ハケ、板ナデ	10YR5/1褐灰	2.5Y7/2灰黄	普 3㎜以下の石英・長石・黒色粒含む	良	
44	SR01第3層	弥生土器	壺	体部	—	—	〔4.2〕	ナデ、櫛描直線文、櫛描波状文	ハケ、ナデ	10YR3/1黒褐	2.5Y3/1黒褐	普 3㎜以下の長石・石英含む	良	
45	SR01第3層	弥生土器	壺	体部	—	—	〔6.0〕	櫛描波状文、直線文2条、ミガキ、マメツ	マメツ	10YR6/1褐灰	10YR7/2にぶい黄橙	普 3.5㎜以下の石英・長石・赤色粒含む	良	
46	SR01第3層	弥生土器	壺	体部	—	—	〔5.3〕	縦ハケのち櫛描波状文、マメツ	指オサエ、板ナデ	10YR3/2黒褐～10YR5/2灰黄褐	2.5Y5/1黄灰	普 0.1～1㎜大の石英・長石・赤色粒多く含む	良	
47	SR01第3層	弥生土器	壺	体部	—	—	〔7.9〕	櫛描波状文、櫛描直線文、ハケ	ハケのち指オサエ	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	普 4㎜以下の赤色粒・3㎜以下の長石・石英・2㎜程度の角閃石含む	良	櫛描波状文1束7条、櫛描直線文1束7条
48	SR01第3層	弥生土器	壺	体部	—	—	〔7.4〕	縦ハケのち櫛描波状文、櫛描直線文	ヘラケズリ後ナデ	10YR3/2黒褐	10YR5/3にぶい黄褐	普 0.1～2㎜大の石英・長石・黒雲母含む	良	
49	SR01第3層	弥生土器	壺	体部	—	—	〔3.5〕	櫛描波状文、櫛描直線文、刺突文	マメツ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙～10YR4/3にぶい黄褐	普 0.5～3㎜大の石英・長石・赤色粒含む	良	
50	SR01第3層	弥生土器	壺	頸部	—	—	〔5.5〕	横ハケ、縦ハケ、指ナデ、指頭圧痕、圧痕文突帯	横ハケ、指頭圧痕のちナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR6/4にぶい橙	普 5㎜以下の石英、3㎜以下の長石含む	良	つまみ出し残存3箇所、接合痕あり、傾き任意
51	SR01第3層	弥生土器	壺	体部	—	—	〔3.4〕	粗い櫛描沈線現存11条	ミガキ	2.5Y3/1黒褐	N3/暗灰	普 2㎜以下の石英・長石含む	良	
52	SR01第3層	弥生土器	壺	体部	—	—	〔5.5〕	刻目文2条、ミガキ	ナデ、指オサエ	2.5Y4/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	普 5㎜以下の石英・長石・黒雲母・金雲母含む	良	外面煤付着
53	SR01第3層	弥生土器	壺	体部	—	—	〔7.1〕	櫛描沈線現存24条、列点文現存2条15箇所	板ナデ、指オサエ、ミガキ、絞り目？	10YR5/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	普 1㎜以下の石英・長石含む	良	
54	SR01第3層	弥生土器	壺	頸部	—	—	〔4.1〕	貼付突帯、刻目文、横ナデ、ミガキ	横ナデ、ミガキ	7.5YR6/2灰褐	7.5YR6/3にぶい褐	普 3㎜以下の石英・長石含む	良	

第５表　出土遺物一覧表③

報告書番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
55	SR01第3層	弥生土器	壺	体部	―	―	〔6.3〕	ハケ、櫛描直線文5条、ミガキ	ナデ、指オサエのちハケ	7.5YR5/2灰褐	7.5YR4/1褐灰	普 1mm以下の石英・長石・赤色粒・金雲母含む	良	
56	SR01第3層	弥生土器	壺	体部	―	―	〔6.0〕	ナデ、ヘラガキ、直線文2条	ナデ、ミガキ	10YR8/2灰白	2.5Y5/2暗灰黄、N3/0暗灰	粗 3mm以下の石英・長石含む	良	
57	SR01第3層	弥生土器	二重口縁壺	口縁部	―	―	〔1.6〕	凹線文5条	横ナデ	7.5YR7/6橙	7.5YR6/6橙	普 2mm以下の石英・長石含む	良	
58	SR01第3層	弥生土器	壺	底部	―	(17.4)	〔7.0〕	ミガキ、指頭圧痕、ナデ	ナデ、剥離	10YR6/2灰黄褐	10YR4/1褐灰	粗 3mm以下の石英・長石含む	良	
59	SR01第3層	弥生土器	壺	底部～体部	―	―	〔10.8〕	ミガキ	ナデ	2.5YR5/8明赤褐	2.5YR4/8赤褐	普 4mm以下の石英・長石・雲母含む	良	黒斑あり
60	SR01第3層	弥生土器	壺	底部	―	8.9	〔5.1〕	ミガキ	ハケ、指頭圧痕、ナデ	7.5YR7/6橙	10YR7/3にぶい黄橙	普 3mm以下の石英・長石・雲母を含む	良	黒斑あり
61	SR01第3層	弥生土器	脚付壺？	脚部	―	(7.0)	〔5.4〕	ナデ、指オサエ	ナデ	7.5YR6/2灰褐	7.5YR7/3にぶい橙	普 5mm以下の石英・長石・赤色粒含む	良	
62	SR01第3層	弥生土器	甕	口縁部	(17.2)	―	〔4.3〕	横ナデ、ヘラ描直線文3条	ナデ、ミガキ	7.5YR5/3にぶい褐	10YR6/2灰黄褐	普 3mm以下の石英・長石含む	良	
63	SR01第3層	弥生土器	甕	口縁～体部	(15.4)	―	〔4.7〕	横ナデ、ハケのちミガキ	横ナデ、ハケ	7.5YR6/4にぶい橙～7.5YR4/2灰褐	10YR4/3にぶい黄褐	普 0.1～5mm大の石英・長石・赤色粒含む	良	内・外面に煤付着、ハケが細かい
64	SR01第3層	弥生土器	甕	口縁～体部	(19.3)	―	〔6.6〕	マメツ、横ナデ、指オサエ	マメツ、ミガキ	5YR8/3淡橙	5YR7/3にぶい橙	普 3mm以下の石英・長石・赤色粒含む	良	口縁部に煤付着
65	SR01第3層	弥生土器	甕	口縁～体部	(26.0)	―	〔5.1〕	ハケ、横ナデ	横ナデ、ミガキ	10YR5/2灰黄褐	7.5YR5/2灰褐	普 3mm以下の石英・長石含む	良	
66	SR01第3層	弥生土器	甕	口縁～体部	(20.6)	―	〔5.5〕	ナデ	指ナデ、マメツ	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR6/3にぶい褐	普 4.5mm以下の石英・長石・赤色粒含む	良	煤付着
67	SR01第3層	弥生土器	甕	口縁～体部	(31.6)	―	〔6.3〕	横ナデ、指オサエ、マメツ	横ナデ、ミガキ	10YR5/2灰黄褐	10YR4/2灰黄褐	普 2mm以下の石英・長石・金雲母含む	良	
68	SR01第3層	弥生土器	甕	口縁～体部	(26.4)	―	〔5.0〕	横ナデ、指オサエ、ハケのち横ナデ、ハケ	横ナデ、ミガキ	7.5YR4/3褐	7.5YR5/3にぶい褐	普 1mm以下の石英・長石含む	良	煤付着
69	SR01第3層	弥生土器	甕	口縁～体部	(15.6)	―	〔8.5〕	横ナデ、指頭圧痕、ミガキ	横ナデ、横ハケ、縦ハケ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	普 2mm以下の雲母・赤色粒・石英含む	良	
70	SR01第3層	弥生土器	甕	口縁部	―	―	〔2.2〕	凹線文、横ナデ	横ナデ	10YR3/2黒褐	10YR3/2黒褐	粗 4mm以下の石英・長石・雲母含む	良	
71	SR01第3層	弥生土器	甕	口縁部	―	―	〔1.5〕	横ナデ、凹線文	横ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR6/4にぶい橙	普 0.1～2mm大の石英・長石・赤色粒含む	良	
72	SR01第3層	弥生土器	甕	口縁部	―	―	〔2.7〕	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	普 1mm以下の長石・赤色粒含む	良	
73	SR01第3層	弥生土器	甕	口縁部	―	―	〔4.2〕	横ナデ	横ナデ	10YR3/1黒褐	10YR7/3にぶい黄橙	普 3mm以下の石英・長石・赤色粒含む	良	
74	SR01第3層	弥生土器	甕	体部	―	―	〔5.15〕	ナデ、櫛描直線文、ミガキ、櫛描波状文	指ナデ、ナデ？	7.5Y3/1オリーブ黒	10YR5/3にぶい黄褐	普 4mm以下の長石・5mm以下の石英含む	良	両面煤付着
75	SR01第3層	弥生土器	甕	体部	―	―	〔8.8〕	ナデ、刺突文、指オサエ、細かなハケ	指オサエのちハケ	2.5Y6/2灰黄	10YR5/1褐灰	普 3mm以下の長石・赤色粒含む	良	
76	SR01第3層	弥生土器	甕	体部	―	―	〔6.6〕	櫛描直線文現存7条、ミガキ	ミガキ	10YR5/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	普 2mm以下の石英・長石含む	良	
77	SR01第3層	弥生土器	甕	体部	―	―	〔9.7〕	不明	板ナデのちミガキ	N1.5/0黒	7.5YR8/4浅黄橙	普 3～0.5mm大の石英・長石・赤色粒含む	良	内面全体に煤付着
78	SR01第3層	弥生土器	甕？	体部	―	―	〔4.8〕	ミガキ、ナデ	不明	10YR5/2灰黄褐	5Y2/1黒	普 1mm以下の長石・赤色粒含む石英・白色粒含む	良	内面に付着物あり
79	SR01第3層	弥生土器	甕？	体部	―	―	〔5.0〕	ミガキ	粗いハケ	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	普 1mm以下の石英・長石・黒雲母含む	良	
80	SR01第3層	弥生土器	甕	体部	―	―	〔4.75〕	ミガキ、櫛描列点文、横ナデ	ハケ	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	普 2mm以下の石英・長石含む	良	
81	SR01第3層	弥生土器	甕？	体部	―	―	〔5.25〕	ミガキ、コゲ	マメツ	10YR5/1褐灰	10YR6/2灰黄褐	普 2.5mm以下の石英・長石含む	良	内面に付着物あり
82	SR01第3層	弥生土器	甕	底部	―	8.7	〔5.0〕	板ナデのちミガキ	底面粘土貼付、指ナデ、粗いハケ	10YR6/2灰黄褐	10YR7/2にぶい黄橙	普 0.1～2mm大の石英・長石含む	良	
83	SR01第3層	弥生土器	甕	底部～体部	―	6.0	〔6.5〕	ミガキ	ミガキ、横ナデ、指頭圧痕	5YR5/6明赤褐	5YR2/1黒褐	普 3mm以下の石英・長石・黒雲母含む	良	黒斑あり
84	SR01第3層	弥生土器	甕	底部	―	5.6	〔6.1〕	ミガキ	ミガキ、指頭圧痕	5YR5/6明赤褐	5YR3/1黒褐	普 4mm以下の石英・長石・雲母含む	良	

第６表　出土遺物一覧表④

報告書番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
85	SR01第3層	弥生土器	甕	底部～体部	―	6.5	〔7.95〕	ナデ、板ナデ、ミガキ	回転ナデ、板ナデ、ミガキ	5YR5/1褐灰	7.5YR5/3にぶい褐	普 4㎜以下の石英・長石・赤色粒含む	良	外面に黒斑あり、甕転用
86	SR01第3層	弥生土器	高杯or鉢	口縁部	―	―	〔2.75〕	ナデ、凹線文、マメツ	ナデ	2.5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	普 2㎜以下の長石・2㎜以下の石英含む	良	
87	SR01第3層	弥生土器	鉢	口縁部	―	―	〔2.7〕	ナデ、横ナデ、凹線文1条	横ナデ、ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	普 3㎜以下の長石・2㎜以下の石英・1㎜以下の角閃石含む	良	
92	SR01	弥生土器	無頸壷	口縁部	(17.6)	―	〔3.45〕	ナデ、工具痕マメツ、ナデ、凹線文、穿孔2箇所、口縁に刻目文	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/3にぶい黄褐	普 3㎜以下の赤色粒、2㎜以下の長石、1㎜程度の角閃石	良	写真あり、外面から内面へ穿孔あり(一部欠損)
93	SR01	弥生土器	無頸壺	口縁～体部	(8.1)	―	〔6.9〕	横ナデ、櫛描直線文29条、列点文2段現存11箇所	絞り、指オサエ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	普 1㎜以下の石英・長石含む	良	
94	SR01	弥生土器	無頸壺	口縁～体部	(9.0)	―	〔11.3〕	沈線文2条、櫛描列点文、櫛描直線文、櫛描円形文、櫛描斜格子文	ミガキ、指ナデ	10YR3/1黒褐	10YR3/1黒褐	普 0.1～0.5㎜大の石英・長石含む	良	
95	SR01	弥生土器	壺	口縁部	(20.4)	―	〔4.7〕	斜格文、刻目文貼付突帯、ナデ、ハケ	ナデ	7.5YR6/1褐灰	10YR7/2にぶい黄橙	普 3㎜以下の石英・長石・赤色粒含む	良	断面接合痕あり
96	SR01	弥生土器	壺	口縁部	(16.8)	―	〔1.4〕	ナデ、刻目文、マメツ	ナデ	10YR5/2灰黄褐	10YR6/2灰黄褐	普 4.5㎜以下の石英・長石・赤色粒含む	良	
97	SR01	弥生土器	壺	口縁部	(14.8)	―	〔4.8〕	横ナデ、凹線文	ナデ、指頭圧痕	5YR5/8明赤褐	5YR6/8橙	普 5㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒含む	良	
98	SR01	弥生土器	壺	口縁部	(12.6)	―	〔3.1〕	ミガキのちナデ	ミガキのちナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	普 2㎜以下の石英・長石含む	良	
99	SR01	弥生土器	壺	口縁～頸部	(18.6)	―	〔6.2〕	刻目文、横ナデ、ケズリ出し突帯と刻目文、横ナデ	横ナデ	2.5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	普 0.1～2㎜大の石英・長石含む	良	
100	SR01	弥生土器	壺	口縁部	(9.8)	―	〔6.3〕	ナデ、板ナデ	指頭圧痕、ナデ	7.5YR6/3にぶい褐	5YR5/4にぶい赤褐	普 3㎜以下の石英・長石含む	良	
101	SR01	弥生土器	壺	口縁部	(9.2)	―	〔5.1〕	刻目文、ナデ、ミガキ	ハケ、ナデ	10YR5/1褐灰	10YR5/2灰黄褐	精良 1㎜以下の石英・長石含む	良	
102	SR01	弥生土器	壺	口縁部	(10.6)	―	〔3.3〕	横ナデ、指オサエ、刻目文、貼付突帯上に刻目文、マメツ	横ナデ、マメツ、ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	普 2㎜以下の石英・長石・赤色粒含む	良	
103	SR01	弥生土器	壺	口縁部	―	―	〔2.4〕	横ナデ、横ナデのち櫛描波状文	ナデ、櫛描波状文	7.5YR7/4にぶい橙	10YR6/2灰黄褐	普 0.1㎜～3㎜大の石英・長石含む	良	
104	SR01	弥生土器	壺	口縁部	―	―	〔2.0〕	刻目文、横ナデ、ハケのちナデ、口縁端部に強いナデ	横ナデ、圧痕文突帯、穿孔1箇所(内から外へ)	7.5YR5/1褐灰	10YR6/2灰黄褐	普 0.1～2㎜大の石英・長石含む	良	
105	SR01	弥生土器	壺	頸部	―	―	〔6.0〕	粗いハケ、横ナデ、貼付突帯、	横ナデ、指オサエ	5YR5/6明赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	普 2㎜以下の石英・長石・黒雲母含む	良	
106	SR01	弥生土器	壺	体部	―	―	〔6.2〕	指頭圧痕文貼付突帯、ハケ	ミガキ、ナデ	7.5YR6/2灰褐	7.5YR5/2灰褐	普 4㎜以下の石英・長石含む	良	
107	SR01	弥生土器	壺	頸部	―	―	〔4.5〕	指頭圧痕文、貼付突帯2条、縦ハケ	ナデ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/4にぶい黄橙	普 3～0.1㎜大の石英・長石・黒雲母含む	良	
108	SR01	弥生土器	壺	頸部	―	―	〔5.9〕	ナデ、指頭圧痕文、貼付突帯	ナデ	10YR4/2灰黄褐、5YR5/6明赤褐	10YR5/3にぶい黄褐	普 0.1～3㎜大の石英・長石含む	良	
109	SR01	弥生土器	壺	体部	―	―	〔7.2〕	櫛描直線文残存10条、ハケのち櫛描波状文残存2段	ハケ	10YR6/2灰黄褐	10YR7/3にぶい黄橙	普 1㎜以下の石英・長石含む	良	
110	SR01	弥生土器	壺	体部	―	―	〔5.4〕	櫛描直線文、櫛描波状文、マメツ	ハケ、指オサエ	10YR6/2灰黄褐	10YR5/2灰黄褐	普 2㎜以下の石英・長石・角閃石・赤色粒・黒色粒含む	良	
111	SR01	弥生土器	壺	体部	―	―	〔6.8〕	櫛描直線文、櫛描波状文	指オサエ、板ナデ	7.5YR8/3浅黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	普 3㎜以下の石英・長石含む	良	
112	SR01	弥生土器	壺	体部	―	―	〔4.2〕	ハケ、櫛描直線文、櫛描波状文	指オサエ、ハケ	10YR5/1褐灰	7.5YR7/2明褐灰	普 2㎜以下の石英・長石含む	良	
113	SR01	弥生土器	壺	体部	―	―	〔4.6〕	ナデ、櫛描直線文、櫛描波状文	ハケ	10YR4/2灰黄褐	10YR3/1黒褐	普 0.1～1.5㎜大の石英・長石含む	良	
114	SR01	弥生土器	壺	体部	―	―	〔8.4〕	櫛描列点文、ナデ	ナデ	10YR4/1褐灰	10YR4/2灰黄褐	普 4㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒含む	良	
115	SR01	弥生土器	壺	底部	―	〔8.6〕	〔8.7〕	ミガキ	板ナデ	10YR6/2灰黄褐	10YR1.7/1黒	普 2㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒含む	良	黒斑あり
116	SR01	弥生土器	壺？	体部？	―	―	〔3.3〕	横ナデ、ヘラ描沈線2条、ミガキ	ヘラケズリのちナデ	7.5YR5/3にぶい褐	10YR5/1褐灰	普 1㎜以下の石英・長石含む	良	
117	SR01	弥生土器	壺？	体部	―	―	〔5.8〕	ナデ、刻目文現存6箇所	ナデ	7.5YR4/2灰褐	7.5YR3/2黒褐	普 1㎜以下の石英・長石・角閃石・金雲母含む	良	外面煤付着

第７表　出土遺物一覧表⑤

報告書番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
118	SR01	弥生土器	壺？	体部	—	—	〔5.6〕	絵画文様(連弧文風）、ナデ	板ケズリ	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	普 2mm以下の石英・長石含む	良	
119	SR01	弥生土器	壺？	体部	—	—	〔5.5〕	沈線3条、ナデ	板ナデ	2.5Y4/1黄灰	10YR6/2灰黄褐	普 2mm以下の石英・長石含む	良	煤付着
120	SR01	弥生土器	甕	口縁～体部	(14.2)	—	〔6.3〕	ナデ、ハケ、凹線文	ナデ、指オサエ、ミガキ	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR6/4にぶい橙～7.5YR4/2灰褐	普 3mm以下の石英・長石含む	良	
121	SR01	弥生土器	甕	口縁部	(18.0)	—	〔4.0〕	沈線、マメツ、表面マメツ	ナデのち粗いハケのちマメツ、ナデのちマメツ	5YR4/3にぶい赤褐	2.5Y5/1黄灰	普 3mm以下の長石含む	良	
122	SR01	弥生土器	甕	口縁～体部	(19.6)	—	〔6.9〕	横ナデ、指頭圧痕、ナデ、マメツ	横ナデ、ナデ	5YR7/8橙	5YR7/6橙	普 4mm以下の石英・長石・赤色粒含む	良	
123	SR01	弥生土器	甕	口縁～体部	(15.8)	—	〔6.6〕	横ナデ、ヘラミガキ	横ナデ、ハケのちナデ	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR5/3にぶい褐	普 2mm以下の石英・長石・角閃石・金雲母含む	良	
124	SR01	弥生土器	甕	口縁～体部	(17.0)	—	〔6.3〕	横ナデ、マメツ	横ナデ、マメツ	5YR5/6明赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	普 3～0.1mm大の石英・長石・角閃石含む	良	
125	SR01	弥生土器	甕	口縁～体部	—	—	〔11.1〕	横ナデ、マメツ	マメツ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR3/1黒褐	普 2mm以下の石英・長石・黒雲母・角閃石含む	良	内面煤付着
126	SR01	弥生土器	甕	口縁部	—	—	〔4.6〕	横ナデ、指頭圧痕、縦ハケ	横ナデ、指頭圧痕、ミガキ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/3にぶい黄褐	普 2mm以下の石英・長石・赤色粒・黒雲母・金雲母・角閃石含む	良	
127	SR01	弥生土器	甕	口縁部	—	—	〔4.1〕	横ナデ、ナデ	横ナデ	7.5YR4/4褐	7.5YR4/4褐	普 2mm以下の石英・長石・雲母含む	良	
128	SR01	弥生土器	甕	口縁部	—	—	〔1.8〕	凹線文3条、横ナデ	横ナデ	7.5YR7/2明褐灰	7.5YR6/1褐灰	普 2mm以下の石英・長石含む	良	
129	SR01	弥生土器	甕	口縁部	—	—	〔7.1〕	ナデ、横ナデ、ハケ	ナデ、マメツ	5YR5/6明赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	普 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良	
130	SR01	弥生土器	甕	口縁～体部	—	—	〔5.6〕	ナデ、ハケ	ナデ、板ナデ、ミガキのち指ナデ	10YR5/2灰黄褐	7.5YR5/2灰褐	普 2.5mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒含む	良	外面コゲ付着
131	SR01	弥生土器	甕	口縁～体部	—	—	〔5.6〕	横ナデ、マメツ	横ナデ、ナデ	7.5YR6/3にぶい褐	7.5YR7/3にぶい橙	普 1mm以下の石英・長石含む	良	煤付着
132	SR01	弥生土器	甕	口縁部	—	—	〔2.5〕	ナデ、直線文	ナデ	7.5YR5/2灰褐	7.5YR6/3にぶい褐+2.5YR6/6橙	普 2mm以下の石英・長石含む	良	
133	SR01	弥生土器	甕	体部	—	—	〔5.8〕	櫛描直線文、表面マメツ、マメツ	ナデ？、マメツ	5YR5/4にぶい赤褐	7.5YR5/4にぶい褐	精良 5mm以下の長石・3mm以下の石英・2mm以下の赤色粒含む	良	
134	SR01	弥生土器	甕	体部	—	—	〔7.9〕	刺突文、マメツ	板ナデ	7.5YR5/2灰褐	10YR4/1褐灰	普 3.5mm以下の石英・長石・赤色粒含む	良	
135	SR01	弥生土器	甕	体部	—	—	〔8.9〕	ハケ、ナデ、刻目文	指オサエ、ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	2.5Y5/3黄褐	普 3mm以下の長石・2mm以下の石英・金雲母・黒雲母含む	良	
136	SR01	弥生土器	甕	体部	—	—	〔7.9〕	ナデ、簾状文2段(3条1束、残存9箇所）、ハケ	ミガキ	2.5Y2/1黒	7.5YR6/4にぶい橙	普 1mm以下の石英・長石・金雲母含む	良	内面煤付着
137	SR01	弥生土器	甕	底部	—	7.1	〔4.0〕	ナデ、粘土紐接合痕	マメツ、指頭圧痕	5YR6/4にぶい橙	2.5YR6/6橙	普 3mm以下の石英・長石含む	良	黒斑あり
138	SR01	弥生土器	コップ型土器	体部～脚部	—	—	〔7.9〕	ミガキ、櫛描直線文3条	ナデ	10YR4/1褐灰	10YR5/1褐灰	普 3mm以下の石英・長石含む	良	把手剥離
139	SR01	弥生土器	コップ型土器	把手	—	—	〔9.3〕	ナデ	ナデ	10YR4/1褐灰	10YR4/1褐灰	普 4mm以下の石英・長石含む	良	
140	SR01	弥生土器	高杯	脚部	—	(13.6)	〔4.5〕	回転ナデ	回転ナデ	7.5YR6/3にぶい褐	5YR5/4にぶい赤褐	普 3mm以下の石英・長石含む	良	円形の透かしあり
141	SR01	弥生土器	高杯	脚部	—	—	〔5.75〕	ナデ、櫛描沈線文3条、ミガキ	ナデ	7.5YR5/4にぶい褐	7.5YR5/4にぶい褐	普 3.5mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒含む	良	
142	SR01	弥生土器	高杯	脚部	—	—	〔3.9〕	ヘラミガキ	指頭圧痕、絞り目	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	普 2mm以下の石英・長石・角閃石含む	良	
143	SR01	弥生土器	高杯	脚部	—	—	〔6.6〕	指オサエ、マメツ	マメツ	10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR7/3にぶい橙	粗 3.5mm以下の石英・長石・赤色粒含む	良	
144	SR01	弥生土器	高杯	口縁部	—	—	〔2.8〕	凹線文、ナデのちマメツ	ナデ	10YR6/2灰黄褐	2.5Y6/3にぶい黄	普 4mm以下の長石、2mm以下の石英含む	良	
145	SR01	弥生土器	鉢	口縁～体部	(38.0)	—	〔7.3〕	凹線文、ナデ	横ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR4/1褐灰	粗 3mm以下の石英、2mm以下の長石、1mm以下の雲母	良	

第８表　出土遺物一覧表⑥

報告書番号	出土遺構	種類	器種	部位	法量(cm)			調整		色調		胎土	焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
146	SR01	弥生土器	鉢	口縁～底部	(10.6)	―	〔6.6〕	ナデ	板ナデ、ケズリ	10YR4/2灰黄褐	10YR4/2灰黄褐	普 2mm以下の石英・長石含む	良	
147	SR01	弥生土器	甑	底部	―	6.4	5.5	ヘラミガキ、マメツ、ナデ	板ナデ	5YR4/3にぶい赤褐	5YR4/2灰褐	普 2mm以下の石英・長石含む	良	内面煤付着
156	SX01	弥生土器	壺	頸部	―	―	〔8.0〕	マメツ、圧痕文突帯2条	ナデ、ハケ	5YR6/6橙	7.5YR7/2明褐灰	普 4mm以下の石英・長石・黒雲母・黒色粒含む	良	
157	SX01	弥生土器	壺	底部～体部	―	(10.3)	〔7.65〕	ナデ、ミガキ、マメツ	ナデ、ヘラケズリ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	普 4mm以下の石英・長石・赤色粒・角閃石含む	良	外面黒斑あり
158	SX01	弥生土器	甕	口縁～体部	16.6	―	〔13.2〕	ハケのちミガキ、ナデ	指オサエのちナデ？	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR6/4にぶい橙	普 4mm以下の石英・長石含む	良	
159	遺物包含層①	弥生土器	壺	口縁部	(18.8)	―	〔1.6〕	斜格子文、マメツ	マメツ	10YR8/6黄橙	7.5YR7/6橙	普 1mm以下の長石含む	良	
160	遺物包含層①（第10層）	弥生土器	甕	底部	―	(7.0)	〔9.6〕	マメツ、一部ミガキ残る	マメツ	5YR8/4淡橙	7.5YR6/2灰褐	普 5mm以下の石英・長石・赤色粒含む	良	
161	遺物包含層②	弥生土器	甕	口縁～体部	(14.0)	―	〔12.9〕	ナデ、マメツ、ミガキ、焼成破裂痕	ミガキ、ナデ、指頭圧痕、工具痕？	10YR8/2灰白	2.5YR7/6橙	普 2mm以下の長石・石英・砂粒含む	良	
162	遺物包含層②	弥生土器	甕	口縁部	―	―	〔2.8〕	櫛描直線文、マメツ	マメツ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	普 3.6mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・金雲母含む	良	接合痕あり
163	遺物包含層②	弥生土器	甕	口縁～体部	―	―	〔6.3〕	ナデ、ハケ	ナデ	10YR4/1褐灰	10YR5/2灰黄褐	普 3.5mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・金雲母含む	良	
164	遺物包含層②	弥生土器	壺	底部～体部	―	(9.2)	〔10.3〕	ミガキ	縦ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	5YR4/1褐灰	普 3mm以下の白色粒・赤色粒・角閃石含む	良	
165	遺物包含層②	弥生土器	壺	頸部	―	―	〔6.4〕	ナデ、ハケ、貼付突帯3条	ナデ、指オサエ	7.5YR6/1褐灰	7.5YR7/3にぶい橙	普 2.5mm以下の長石・赤色粒・金雲母含む	良	
166	遺物包含層②	弥生土器	壺	口縁～頸部	(11.8)	―	〔4.3〕	刻目文、横ナデ、ハケ	横ナデ、ハケのちナデ	7.5YR4/2灰褐	10YR5/3にぶい黄褐	普 0.1～2mm大の石英・長石含む	良	
167	第15層	弥生土器	鉢	底部～体部	(42.6)	(10.0)	28.0	指頭圧痕、マメツ、粘土紐痕	ナデ、指頭圧痕、マメツ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/2灰黄褐	普 3mm以下の長石・砂粒含む	良	内面に黒斑
168	表採	弥生土器	壺	口縁部	(14.6)	―	〔4.6〕	ハケ、ナデ、凹線文3条	ナデ、凹線文2条	7.5YR7/3にぶい橙+5YR6/6橙	7.5YR7/3にぶい橙	普 3mm以下の石英・長石含む	良	
169	表採	弥生土器	甕	口縁部	(30.3)	―	〔5.0〕	ナデ、凹線文	ナデ、工具痕	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR5/3にぶい褐	普 2.5mm以下の石英・長石・赤色粒・黒色粒・角閃石・金雲母含む	良	
170	表採	弥生土器	甕	口縁～体部	(16.0)	―	〔5.9〕	刻目文、ナデ、横ナデ、ハケ	横ナデ、ナデ？、マメツ	10YR7/3にぶい黄橙	7.5YR7/3にぶい橙	普 0.1～2mm大の石英・長石・赤色粒含む	良	
171	表採	弥生土器	甕？	体部	―	―	〔7.85〕	ミガキのちナデ、ハケのちナデ	ハケ、ミガキ	10YR8/3浅黄橙	2.5Y7/2灰黄	普 1mm以下の長石含む	良	外面一部煤付着
172	寄贈資料	須恵器又は備前焼	甕	頸部	―	―	〔4.0〕	タタキ、ナデ、ハケ、カキ目	ナデ、青海波文	5YR5/2灰褐、N5/0灰	7.5Y6/1灰	精良 2mm以下の石英・長石含む	良	
173	寄贈資料	須恵器又は備前焼	鉢?	口縁部	(18.0)	―	〔2.2〕	回転ナデ	回転ナデ	10YR5/2灰黄褐	5Y6/1灰	普 2mm以下の石英・長石含む	良	
174	寄贈資料	備前焼	甕	口縁部	―	―	〔2.0〕	横ナデ、ナデ、凹線2条	横ナデ	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	普	良	

石器

報告書番号	遺構・層位	種類	法量(cm,g)				石材	備考
			長さ	幅	厚さ	重量		
24	SR01第2層	たたき石	12.0	7.4	2.2	247.6	砂岩	
88	SR01第3層	打製石斧（石鍬）	〔5.0〕	〔4.0〕	〔1.1〕	23.5	サヌカイト	
89	SR01第3層	剥片	〔5.8〕	〔5.8〕	1.4	29.9	サヌカイト	
90	SR01第3層	剥片	6.9	4.7	1.2	18.5	サヌカイト	
91	SR01第3層	たたき石	12.7	10.8	8.3	1500.0	砂岩	
148	SR01	楔形石器	11.0	6.0	1.9	101.4	サヌカイト	両極技法を用いた石材
149	SR01	石鏃	4.7	2.4	0.5	6.1	サヌカイト	
150	SR01	楔形石器	〔3.2〕	〔5.7〕	〔1.1〕	25.1	サヌカイト	
151	SR01	管玉	3.0	0.5	0.5	1.1	碧石	

木器

報告書番号	遺構・層位	種類	法量(cm)			樹種	備考
			長さ	底径	器高		
152	SR01第3層	杭	〔15.1〕	3.4	3.1	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節	
153	SR01第3層	板材	〔28.7〕	〔5.6〕	1.0	不明	
154	SR01	板材	〔17.5〕	〔8.0〕	3.6	マメ科サイカチ属サイカチ	
155	SR01第3層	板材	63.9	3.0	1.3	ブナ科コナラ属アカガシ亜属	

写真図版

写真図版 1

１－１　SR01 検出状況（西から）

１－２　SR01 完掘状況（北から）

２－１　SR01 西側断面状況（北から）

２－２　SR01 中央付近断面状況（北から）

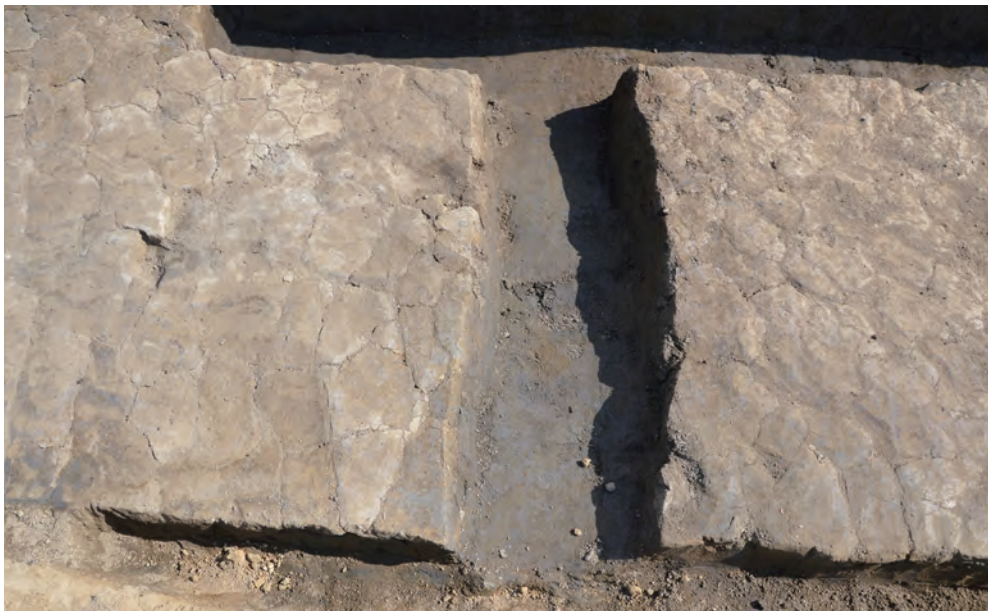
３－１　SR01 東側断面状況（北から）

３－２　SR01 自然木確認状況（西から）

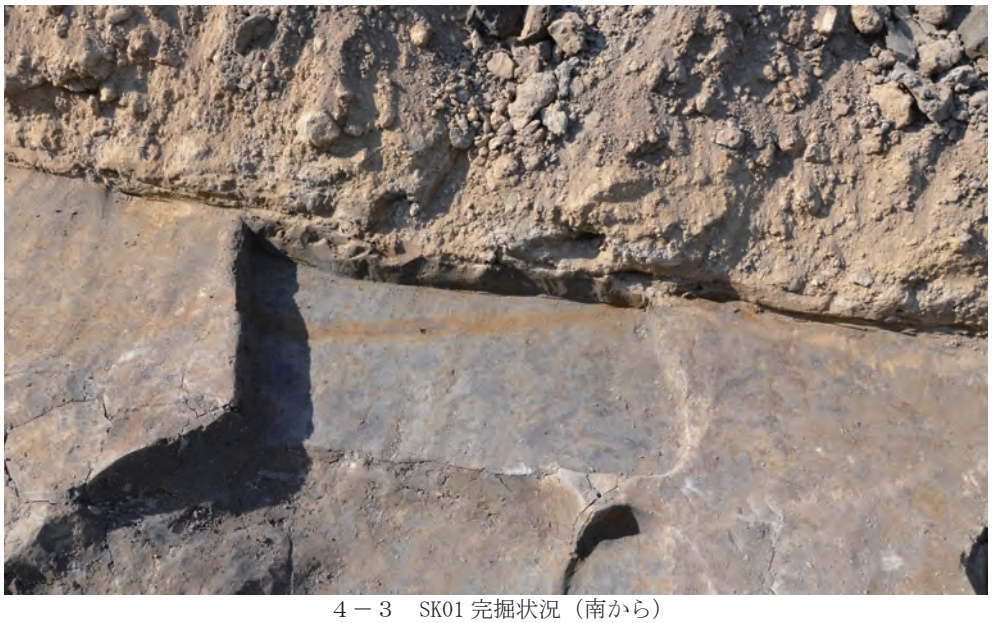
３－３　SR01 杭確認状況（北から）

３－４　SR01 土器出土状況（北から）

４－１　SD01 完掘状況（北から）

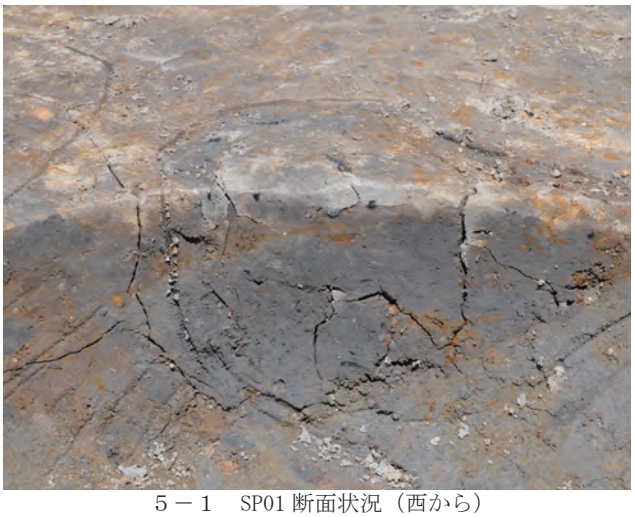


４－２　SD02 完掘状況（北から）

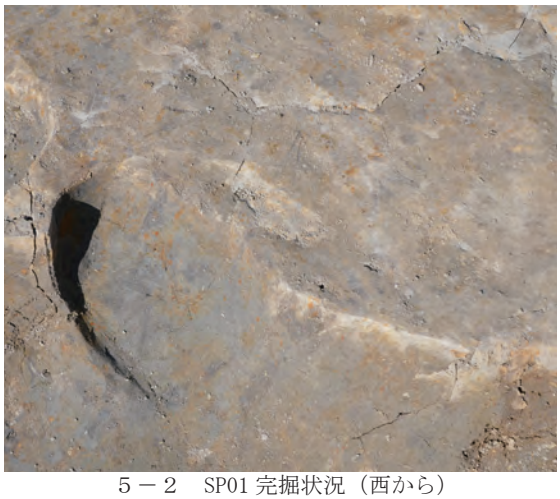


４－３　SK01 完掘状況（南から）

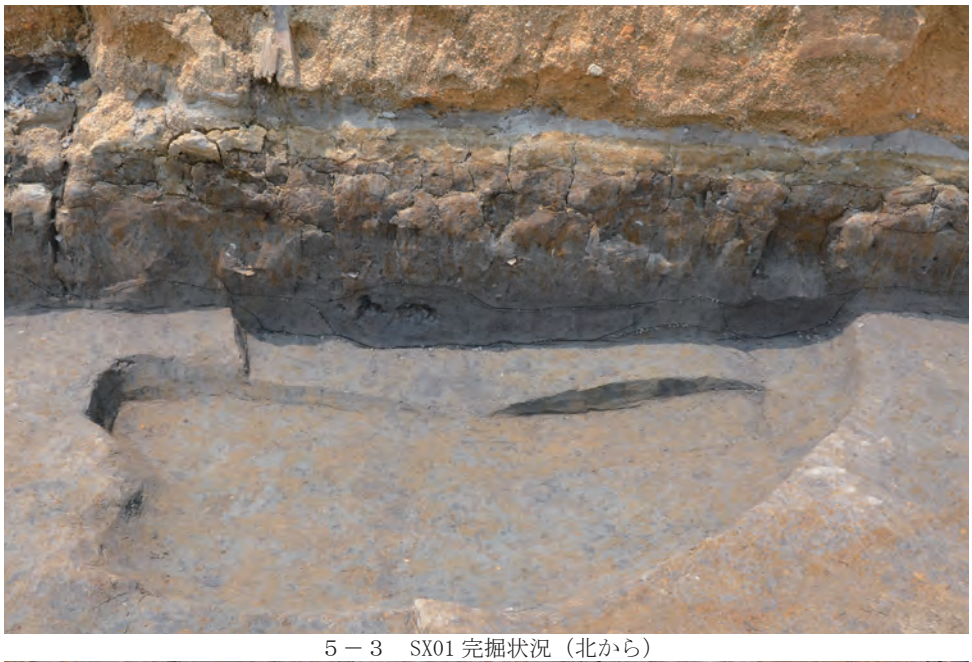
写真図版 5



５－１　SP01 断面状況（西から）



５－２　SP01 完掘状況（西から）



５－３　SX01 完掘状況（北から）

５－４　SX01 遺物出土状況（北から）

６－１　遺物包含層①上層完掘状況（西から）

６－２　遺物包含層①下層完掘状況（西から）

７－１　遺構完掘状況（西から）

７－２　調査区東側断面確認状況（北西から）

８－１　調査区西側断面確認状況（北から）

８－２　噴砂確認状況（北から）

9　出土遺物集合写真

10－1　凹線文・口縁が肥厚する土器の一群

10－2　出土甕類

11－1　櫛描直施文・波状文

11－2　口縁部施文文様

11－3　圧痕文突帯

12－1　弥生土器　壺①

12－2　弥生土器　壺①（他地域）

12－3　弥生土器　壺②（他地域）

12－4　遺物包含層②　弥生土器　甕

12－5　第15層　弥生土器　鉢

12－6　SX01　弥生土器　甕

12－7　弥生土器　壺

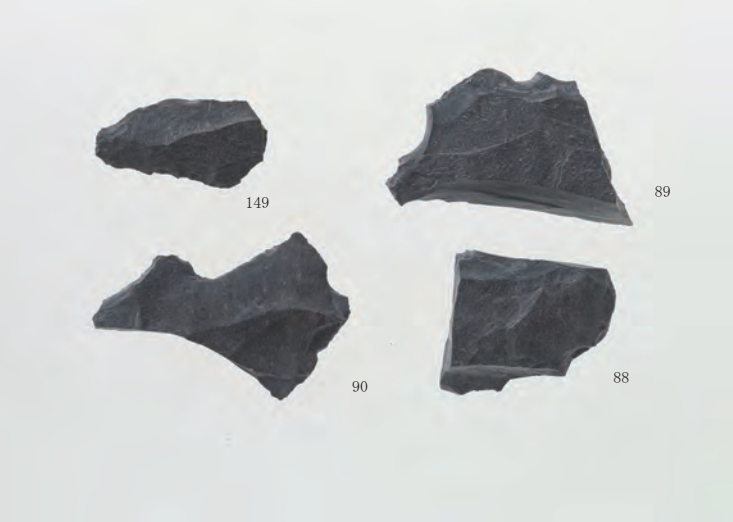
12－8　弥生土器　壺（他地域？）

13－1　弥生土器　高杯

13－2　弥生土器　内面付着物

13－3　弥生土器　コップ型土器把手

13－4　弥生土器　壺重弧文



13－5　石器　剥片

13－6 弥生土器　赤色顔料付着状況

13－7　管玉

報　告　書　抄　録

ふりがな	おくのいけいせき
書名	奥ノ池遺跡
副書名	奥の池堤防耐震補強工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第214集
編著者名	香川　将慶・有岡　京香
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760－8571　香川県高松市番町一丁目8番15号　　TEL087－839－2660
発行年月日	西暦2021年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間	発掘 面積	発掘 原因
おくのいけいせき 奥ノ池遺跡	かがわけん 香川県 たかまつし 高松市 にしかすがちょう 西春日町	37201		34° 40′ 15″	134° 44′ 44″	2019.6.5～ 2019.6.21	112㎡	奥の池堤防 耐震補強 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
奥ノ池遺跡	集落跡	弥生時代中期	流路跡、溝、 土坑、ピット	弥生土器、石製品、 木製品	

要約	弥生時代中期前葉から中期中葉頃の土器がまとまって出土した流路跡を検出した。他地域からの搬入土器やその影響を受けたと考えられる土器が出土している。灌漑用の流路として整備された可能性があり、西ハゼ土居遺跡や松並・中所遺跡に連続する流路跡と考えられる。

奥の池堤防耐震工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

奥ノ池遺跡

令和 3 年 3 月 31 日

編 集　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目 8 番 15 号
発 行　高松市教育委員会
印 刷　（有）中央ファイリング